

ネット時代における生活者の 「個人情報」と「プライバシー」

～生活者アンケートの結果から～

2005年5月31日

株式会社 NEC総研

調査グループ 小泉 雄介

はじめに

個人情報保護法の全面施行や相次ぐ個人情報漏えい事件などを受けて、企業サイドの個人情報保護に対する意識は従来にない高まりを見せています。情報漏えい対策製品やウイルス対策製品を中心としたセキュリティ製品は市場規模を拡大し、プライバシーマーク認定企業も2005年4月には1300社を超え、申請企業はさらに増加している状況です。個人情報保護法の全面施行をめぐって「特需」が発生しているとの報道もあります。

こうした保護意識の高まりは企業の社会的責任という観点からは望ましいことであります。しかし、マスコミや評論者の煽り立てぶりや、企業側の半ば強迫観念的な対応ぶりを見るにつけ、当社では、そもそも個人情報やプライバシーの当事者である生活者の意識について実際のところはどうなっているのか、ということに対する興味と疑問が膨れ上がっていきました。

NEC総研ではこのような観点も含め、2005年1月にインターネットモニターに対してアンケート調査（有効回答数約1000名）を実施し、「個人情報」と「プライバシー」に対する消費者の意識について、影の部分も含めて、多面的に光を当てています。本発表では、この調査で得られた結果について報告します。

調査方法について

- I. 生活者の考える「個人情報」と「プライバシー」
- II. 個人情報の提示を求められたら…
- III. 身近な人は知らない個人的な事柄
- IV. 個人間におけるプライバシー侵害
- V. 利用サービス別に見た分析
- VI. まとめと考察

調査方法について

- 調査期間：2005年1月14日～20日
- 調査テーマ：個人情報やプライバシーに関する生活者の意識調査
生活者の意識にある個人情報やプライバシーに関して、その実態を明確にすることを意図。
- 調査方法：NECのインターネットサービスBIGLOBEが運営するインターネットリサーチシステム「DR-1」を利用。
- 調査対象：5つの年齢層別に男女各100名を対象に調査を実施。
結果的に得られた有効回答者数は1134名。

性別・年代	有効回答者数	性別・年代	有効回答者数
男性		女性	
24歳以下	108	24歳以下	107
25～34歳	120	25～34歳	119
35～44歳	112	35～44歳	109
45～54歳	115	45～54歳	119
55歳以上	112	55歳以上	113
男性計	567	女性計	567
全体計			1134

I. 生活者が考える「個人情報」と「プライバシー」

●「個人情報」、「プライバシー」という言葉の意味について、生活者はどのように捉えているか？

→「個人情報」

- ・個人情報保護法では「個人情報とは、特定の個人を識別できる情報のことである」と定義。
- ・経済産業省ガイドラインにおいて、どのような情報項目が法的な意味で情報に該当するかについて指針。

→「プライバシー」

- ・辞書や辞典において様々な定義。

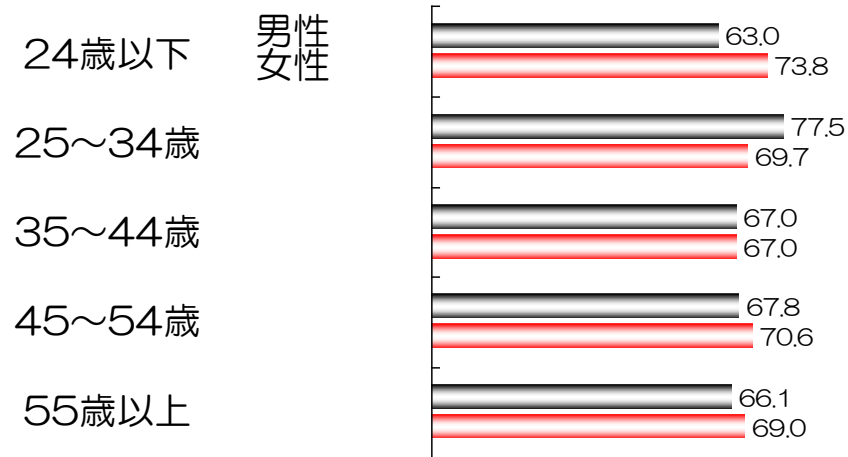
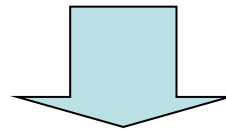
→「プライバシーの権利」

- ・「ひとりで放っておいてもらう権利」とする古典的な定義や
- ・「自己に関する情報を誰にどの程度に開示するかを自分でコントロールする権利（自己情報コントロール権）」とする定義が学界を始めとして広く支持。

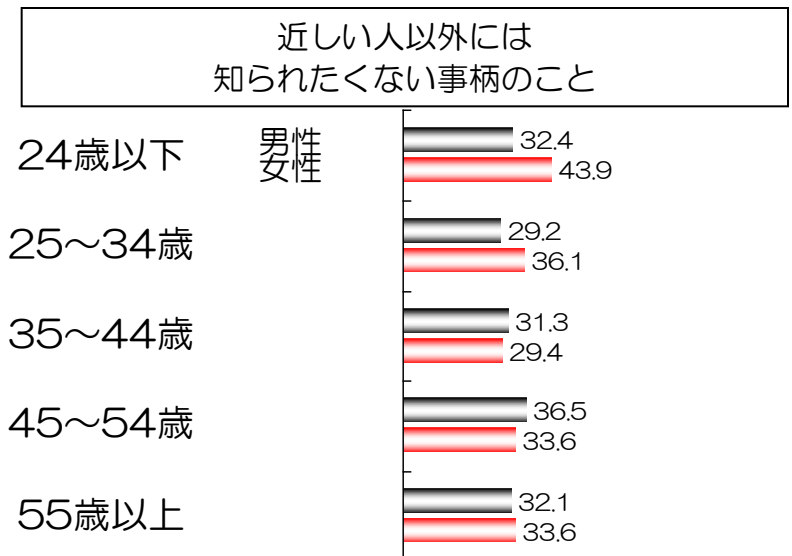
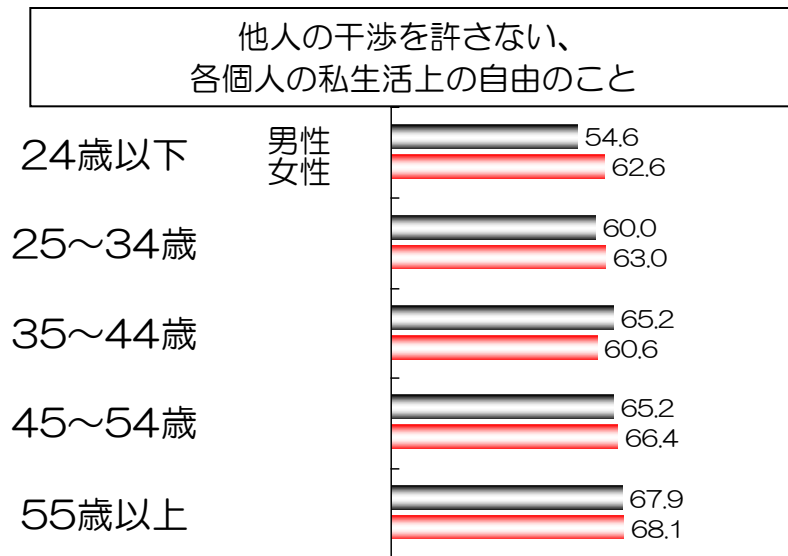
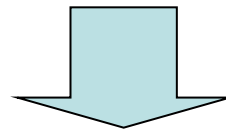
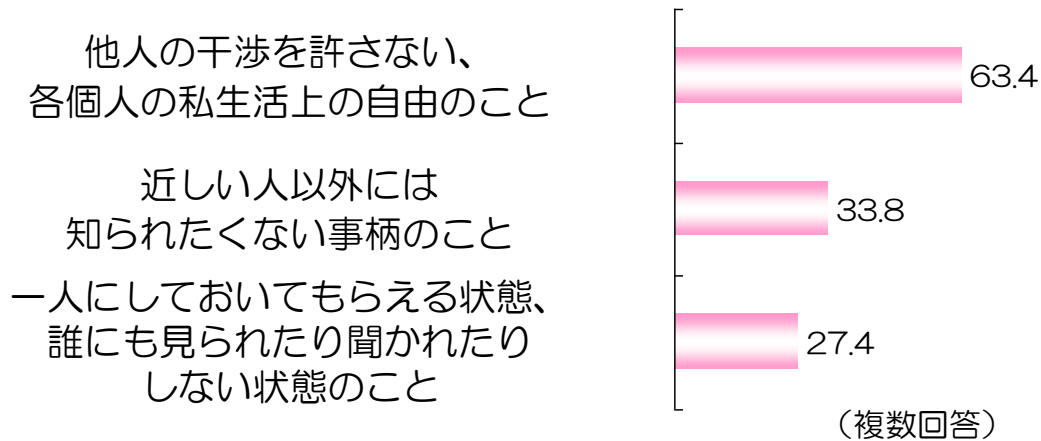
●本調査では、こうしたフォーマルな定義をいったん離れ、生活者が「個人情報」や「プライバシー」といった言葉の意味をどのように捉えているかを調査。

生活者の考える「個人情報」とは？

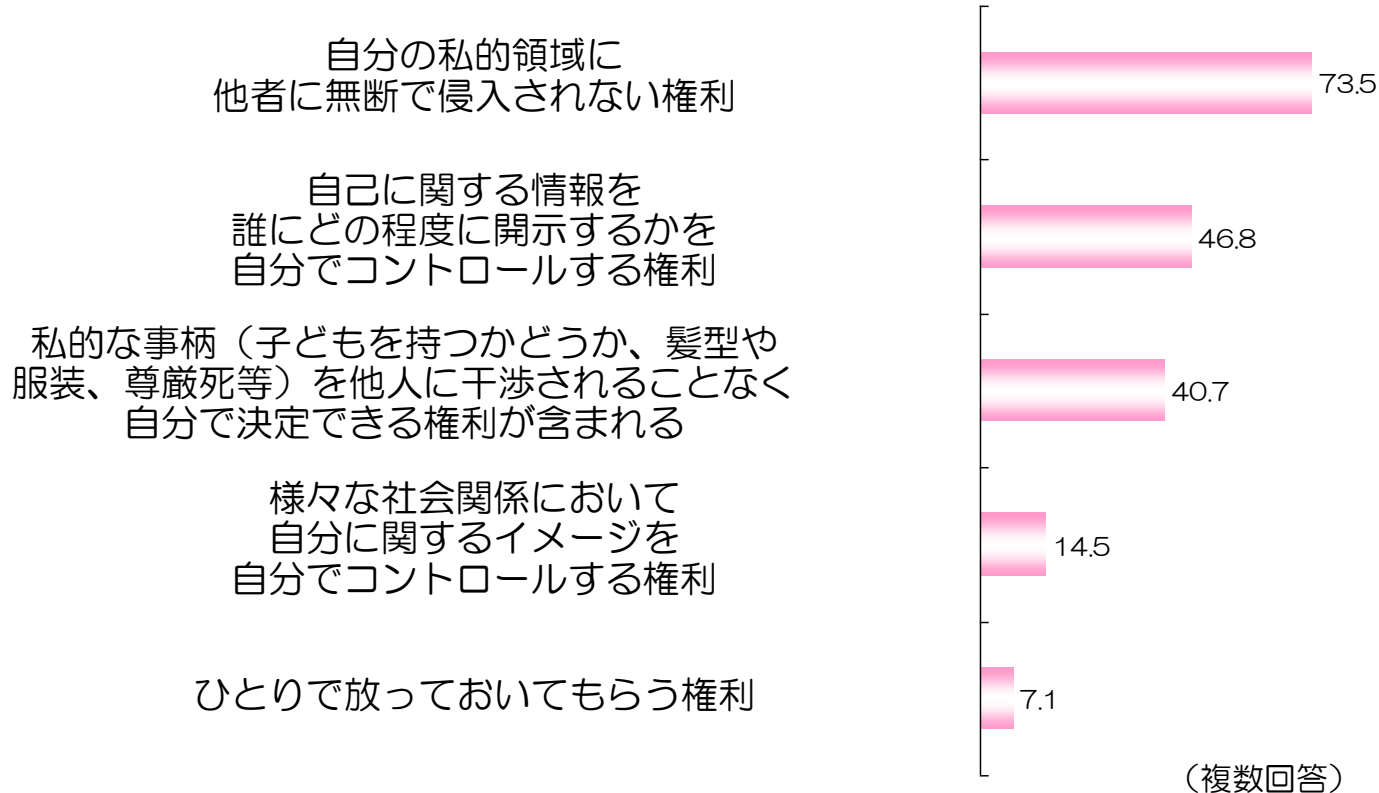
個人情報とは特定の個人を
識別できる情報のことである



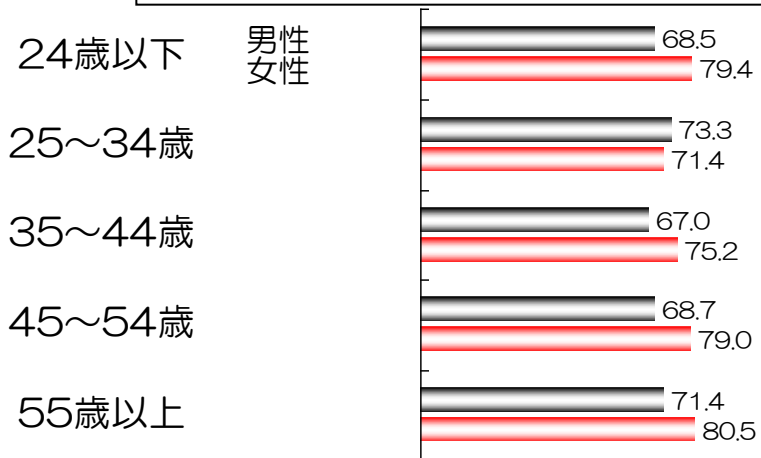
生活者の考える「プライバシー」とは？



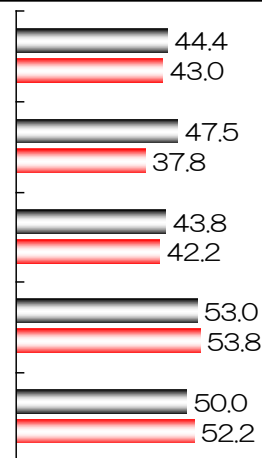
「プライバシーの権利」とは、どういうものか？



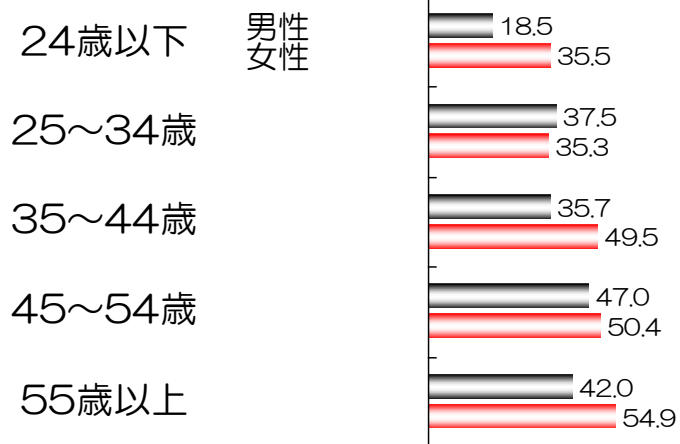
自分の私的領域に
他者に無断で侵入されない権利



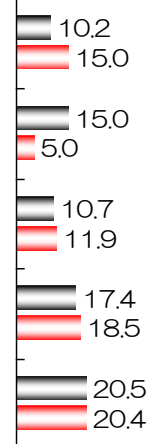
自己に関する情報を誰にどの程度に開示する
かを自分でコントロールする権利



私的な事柄（子どもを持つかどうか、髪型や
服装、尊厳死等）を他人に干渉されることなく
自分で決定できる権利が含まれる



様々な社会関係において自己に関する
イメージを自分でコントロールする権利

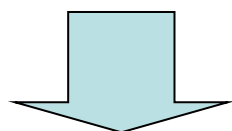
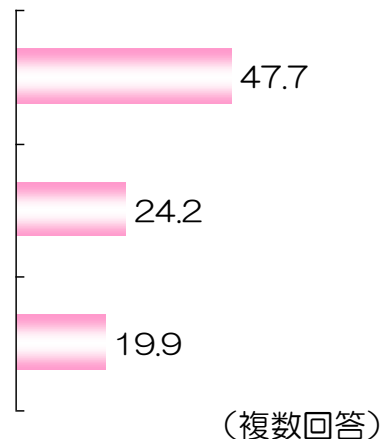


「個人情報」と「プライバシー」はどのような関係か？

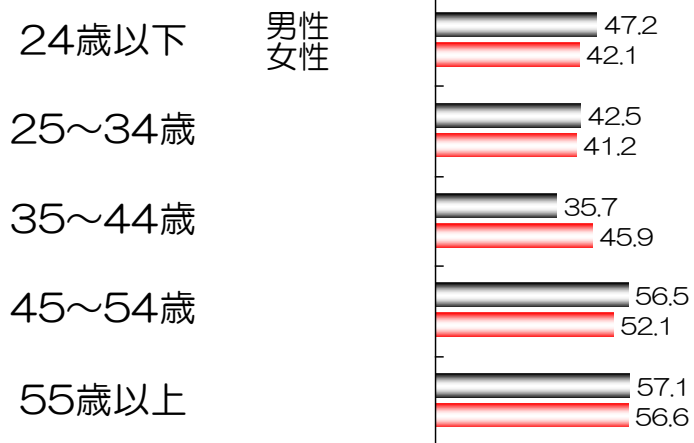
個人情報の中には
プライバシーでない情報もある

個人情報はすべてプライバシー
として取扱う必要がある

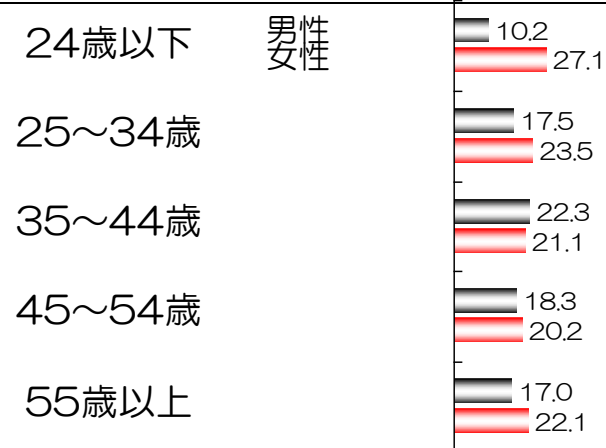
個人情報とプライバシーは
同じ概念である



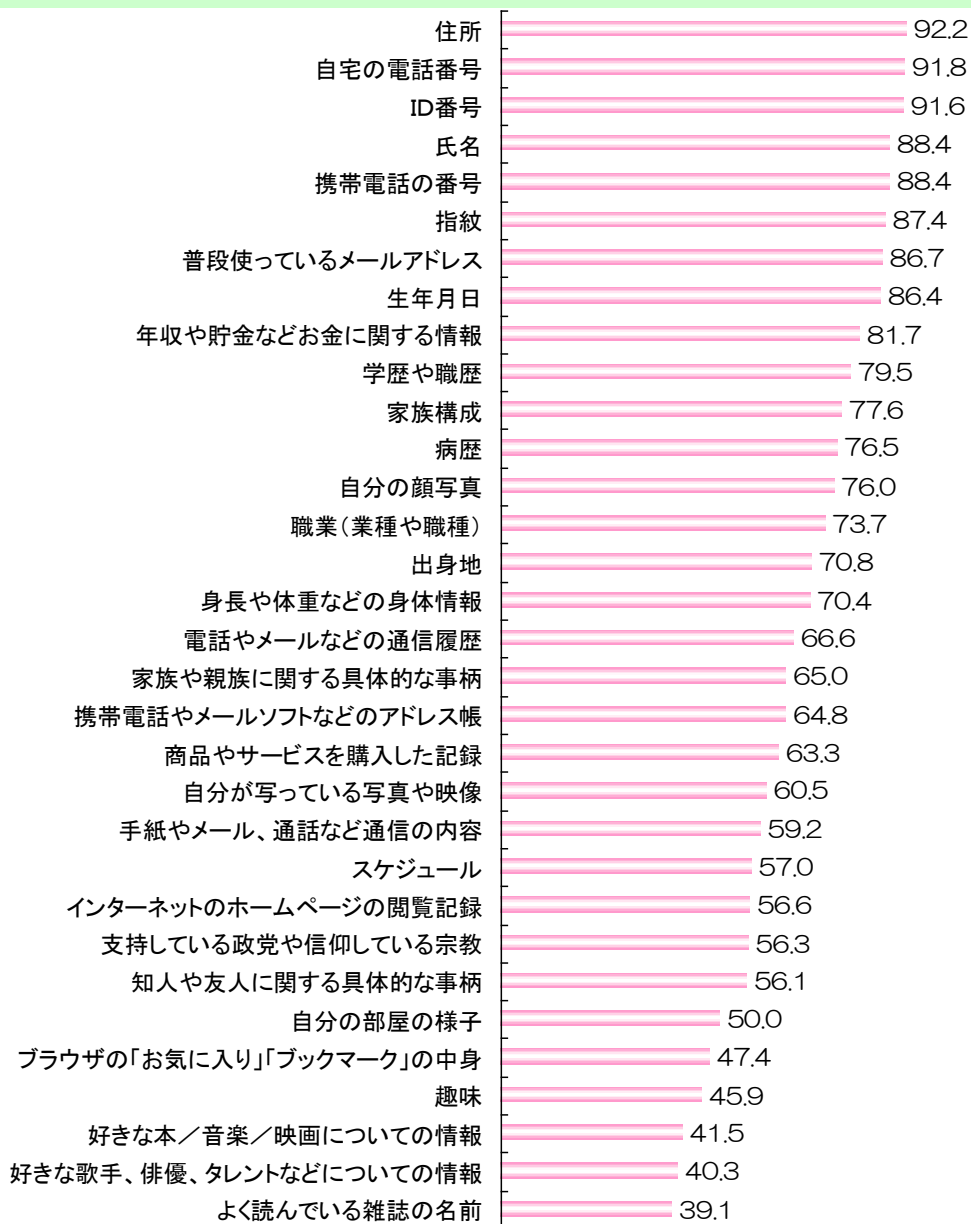
個人情報の中には
プライバシーでない情報もある



個人情報とプライバシーは
同じ概念である



具体的にどのような情報が「個人情報」だと思うか？



- 住所、電話番号、ID番号、氏名といった、それによって個人を識別できたり、個人にアクセスすることができるような情報（個人識別情報）が上位に並び。

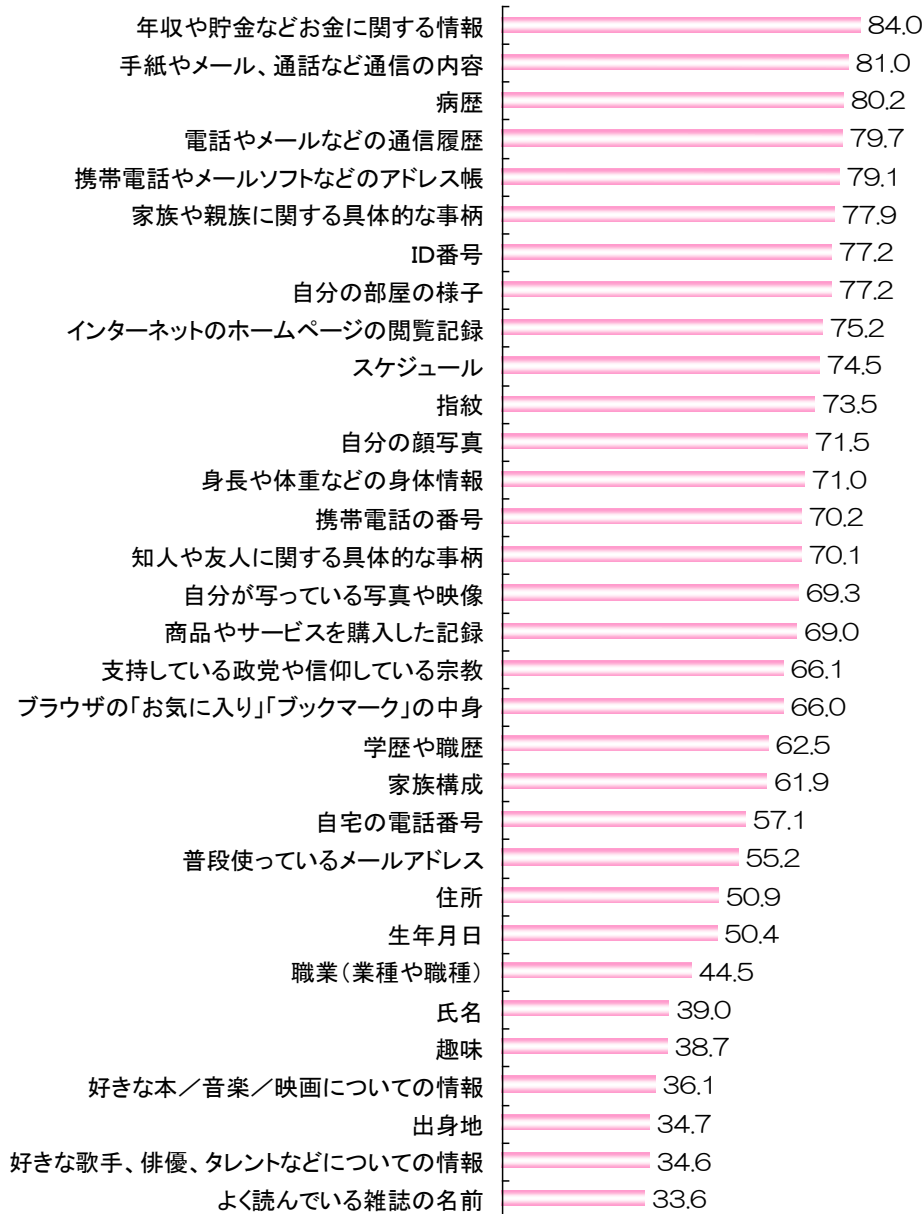
- お金に関する情報、学歴・職歴といった個人の属性情報についても上位に。

- 趣味関連の情報については割合が低い。

- 男女別で見た場合、女性の方が全体として個人情報との回答の割合が高い。

- 年代別で見た場合は、若い年代の人ほど全体として個人情報と回答する割合が高い。

具体的にどのような情報が「プライバシー」だと思うか？



・ お金に関する情報、病歴、ID番号といった、個人情報に該当する割合も高かった情報項目と、電話やメールなどの通信内容や通信履歴、アドレス帳、ホームページの閲覧履歴といった通信関連の情報項目が上位に並ぶ。

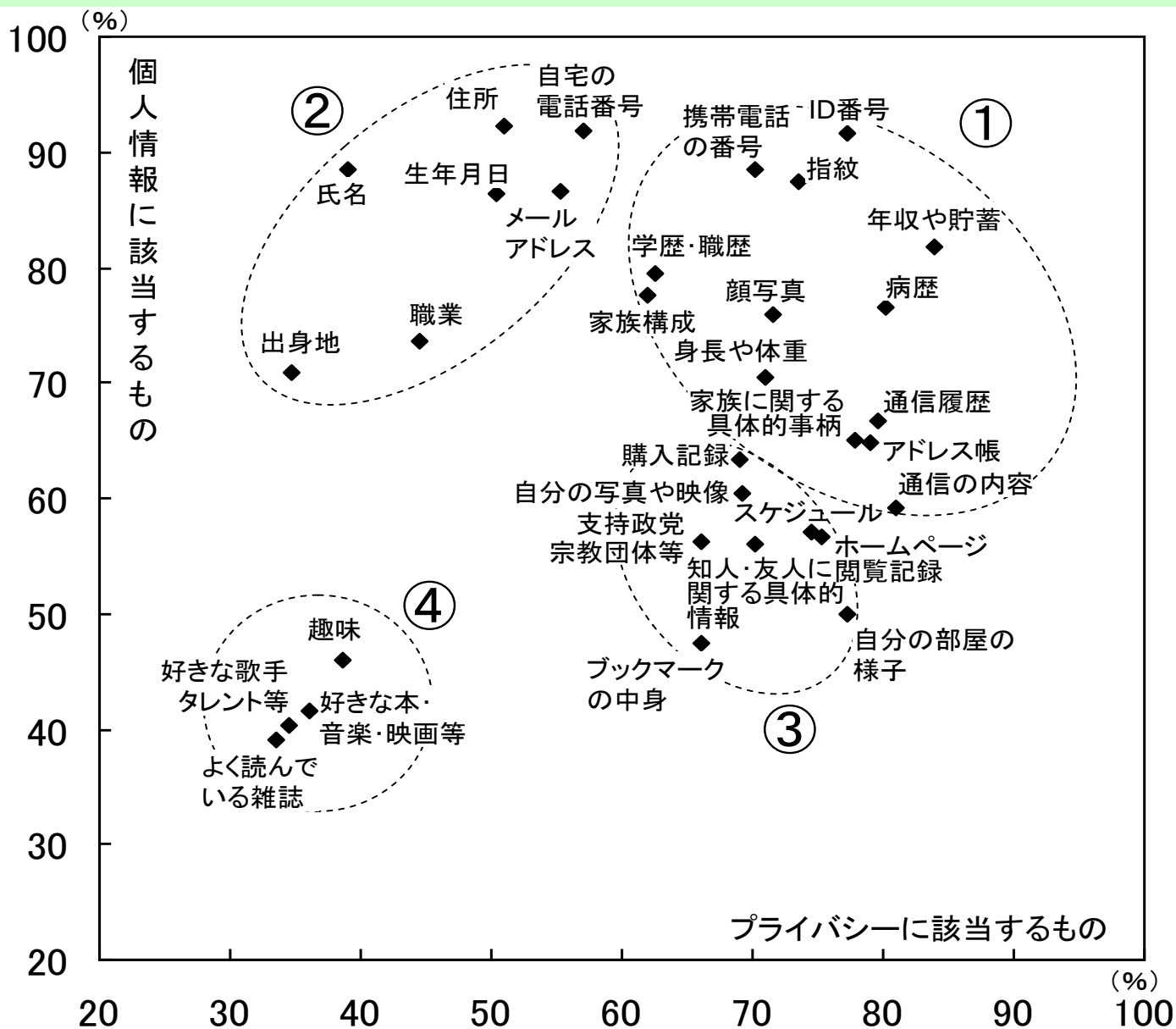
・ 家族や親族に関する情報、自分の部屋の様子といった家庭内の事柄も上位に。

・ 男女別で見た場合、女性の方が全体としてプライバシーと回答する割合が高い。特に顔写真、自分の写真や映像、身長体重など身体的特徴を記録した情報に関しては、女性ほど割合が高い。

・ 年代による違いは、氏名、住所といった社会生活上で流通させている情報に対し、若い年代ほどプライバシーに該当すると回答。

・ 他方で、ID番号、指紋などの個人識別情報や、年収・貯金、支持政党・宗教については年代が高くなるほどプライバシーに該当すると回答。

生活者の考える「個人情報」と「プライバシー」～～情報項目の分布マップ～～



①個人情報・プライバシー双方に該当するという意識が高い情報

ID番号（住民票コード・免許証番号・保険証番号・社員番号等）・年収や貯金の情報・指紋・携帯電話番号・病歴・顔写真・通信履歴・アドレス帳の内容・家族に関する具体的事柄・学歴職歴・身長や体重・通信の内容・家族構成

- ・生活者が現時点でこの問題に関してある意味で最も敏感に感じている情報。
- ・相当な必要に迫られた状況でない限りこれらの情報を生活者の側から積極的に開示することはあり得ない。

②個人情報という意識は高いが、プライバシーに該当する意識は低い情報

氏名・住所・自宅の電話番号・生年月日・メールアドレス・職業・出身地

- ・名刺やプロフィールに記載されるような基本的な情報。
- ・個人情報としての重要性は認識しつつも、これらのある程度開示したり流通させたりすることが社会生活上必要であるものであって、プライバシーという意味合いからは若干異なるものと認識している。
- ・ただし、人によっては開示に消極的である。

③プライバシーという意識は高いが、個人情報という意識は低い情報

自分の部屋の様子・ホームページの閲覧記録・スケジュール・知人や友人に関する具体的事柄・自分が写った写真や映像・商品などの購入記録・ブックマークの中身・支持政党や宗教

- ・ 個人を特定するには至らないものの、個人の意識や行動を知るうえで重要な情報であり、通常限られた場面や相手にしか開示されない情報
- ・ 逆に、開示する相手との信頼関係あるいは開示することによってもたらされるメリットによっては、生活者はこれらの情報を開示したり管理記録することを容認する可能性がある。
- ・ インターネット上の個人ホームページやウェブログにおいてこれらの情報が掲載されるケースは比較的多く、インターネット上のサービスにおいても、これらの情報の管理や共有を行うことで成り立っているものも多い。

④個人情報・プライバシー双方に該当するという意識が低い情報

趣味・好きな本や音楽や映画・好きな歌手やタレント・よく読んでいる雑誌

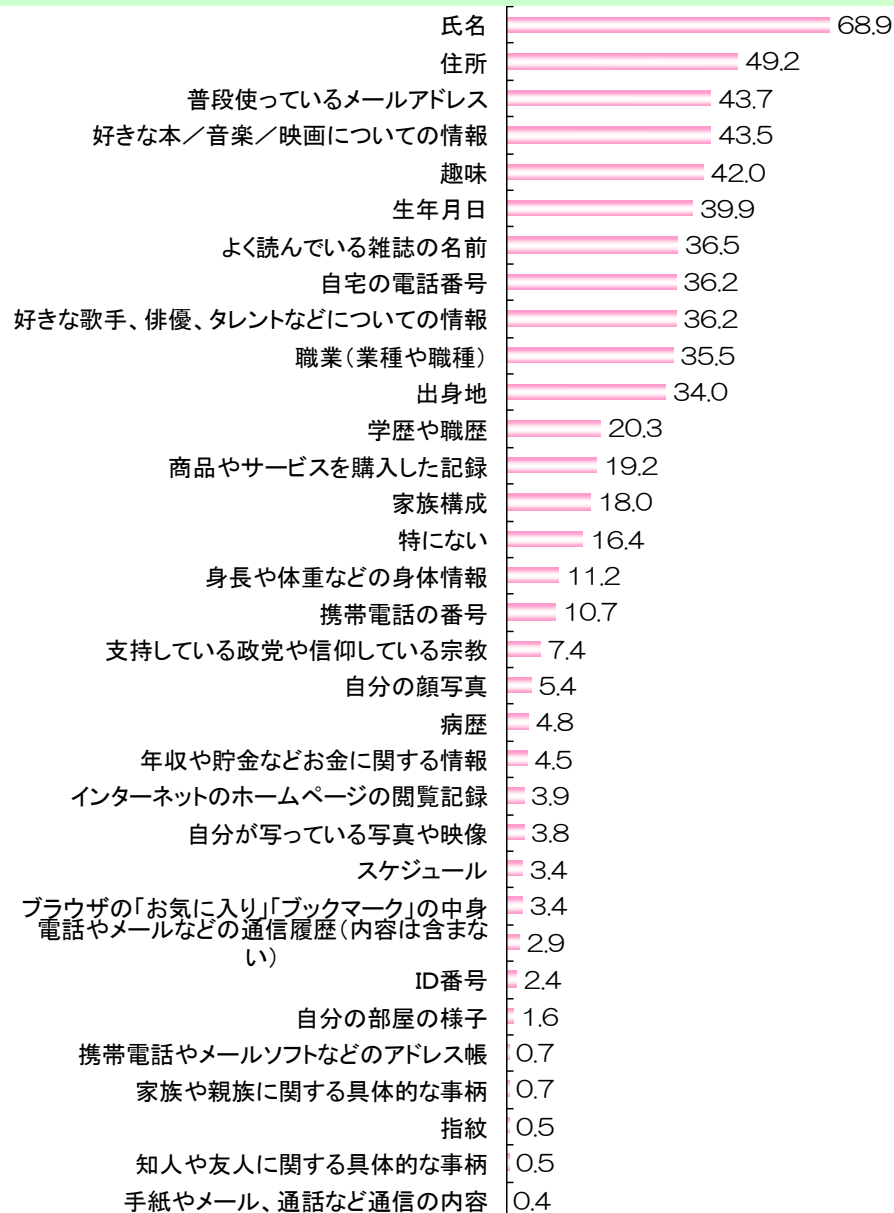
- ・ 生活者が開示や情報の流通について積極的に容認している情報。
- ・ インターネットの掲示板やソーシャルネットワーキングサービスにおいて、仲間探しやコミュニティを形成するうえで必要不可欠な情報。

Ⅱ. 個人情報の提示に関する生活者の意識

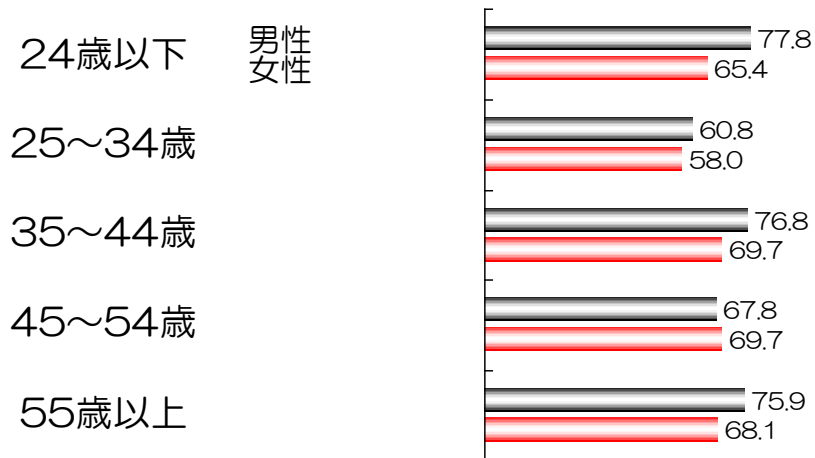
●生活者が、実際に個人情報の開示を求められた場合、情報の内容や開示する相手によって、行動はどの様に変わってくるのだろうか？

●個人情報収集時の様々な状況・シチュエーションを調査の中で再現することには限界があるので、今回はあえて多少不自然な形式になることを承知のうえで、情報を開示する相手が誰か（企業などの団体、国家や行政機関、個人としての他人）という視点に限定。

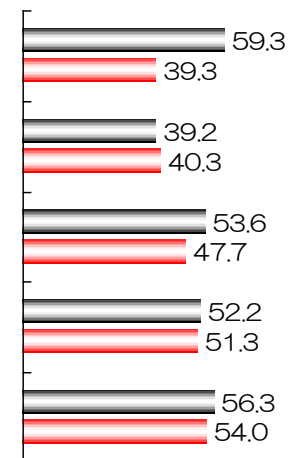
企業に対して開示してもよいと思う情報



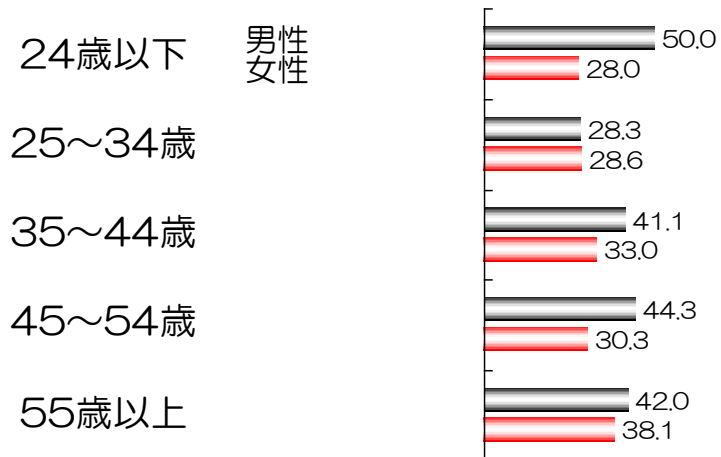
氏名



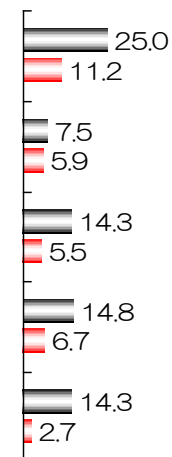
住所



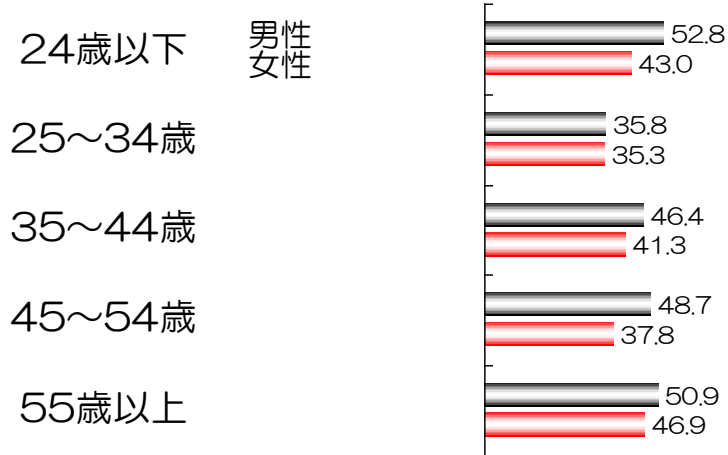
自宅の電話番号



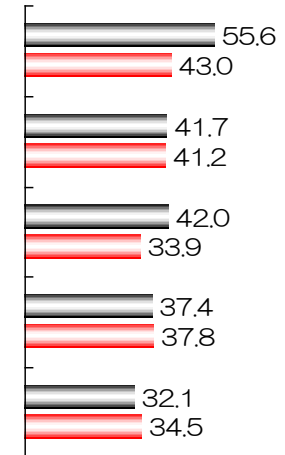
携帯電話の番号



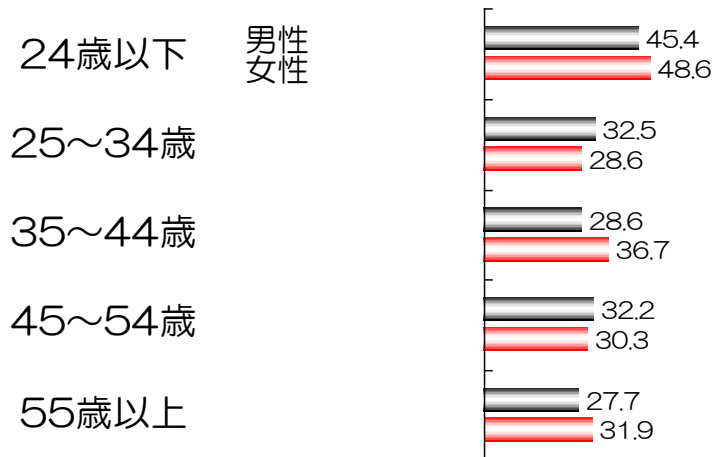
普段使っているメールアドレス



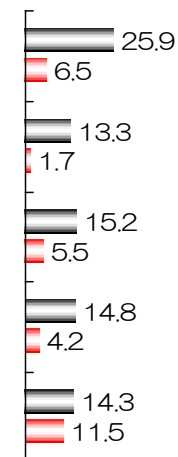
生年月日



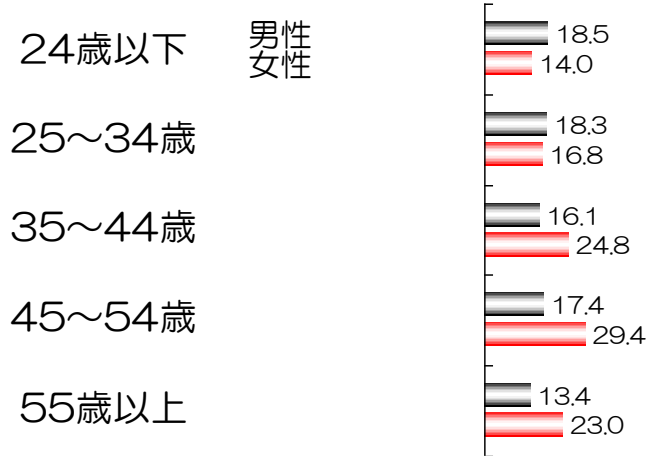
出身地



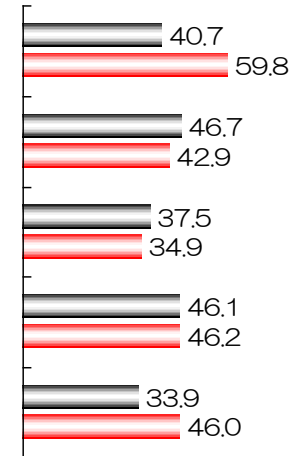
身長や体重などの身体情報



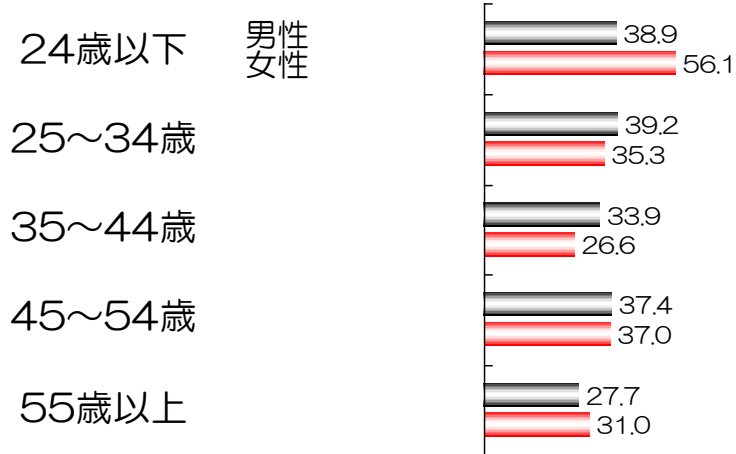
商品やサービスを購入した記録



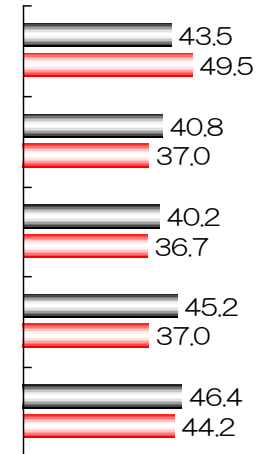
好きな本／音楽／映画についての情報



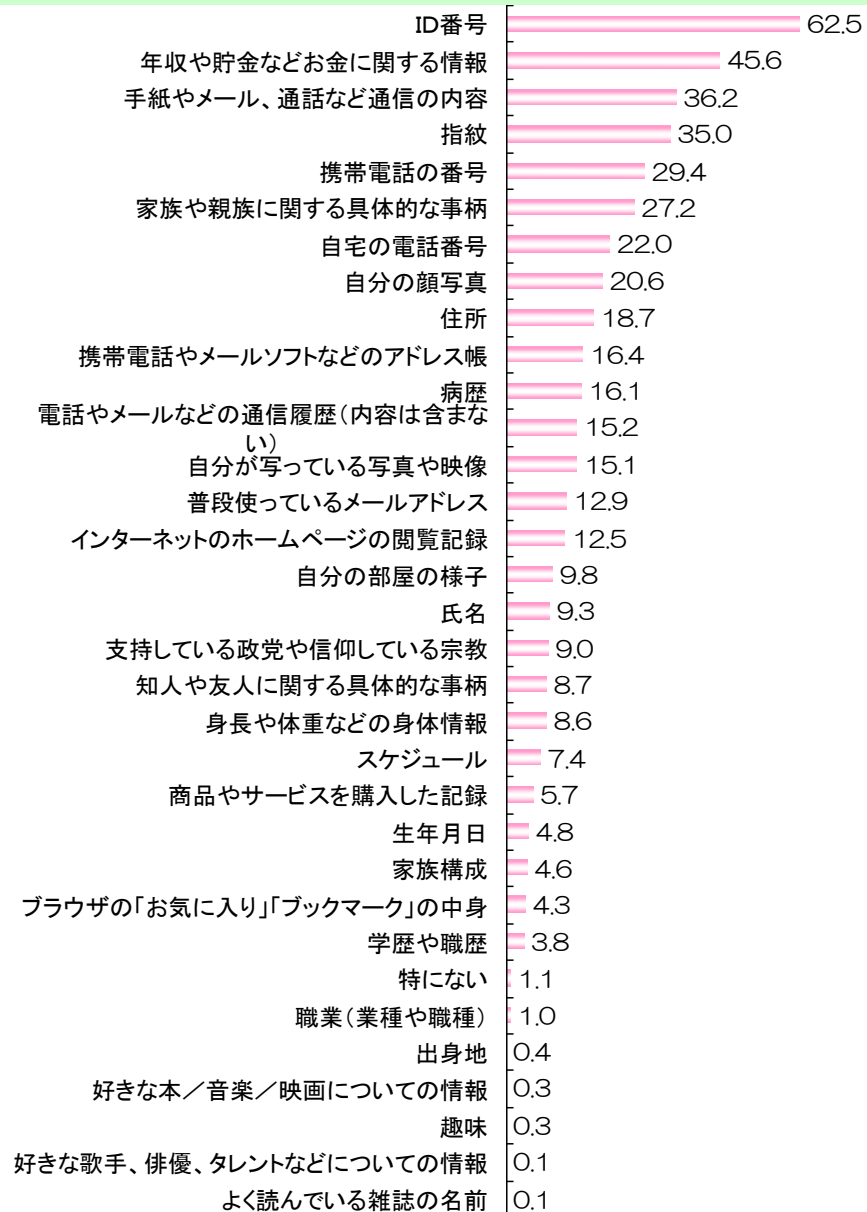
好きな歌手、俳優、タレントなどについての情報



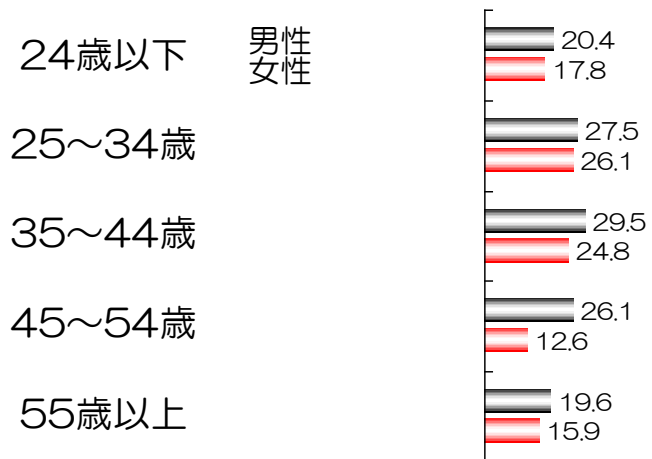
趣味



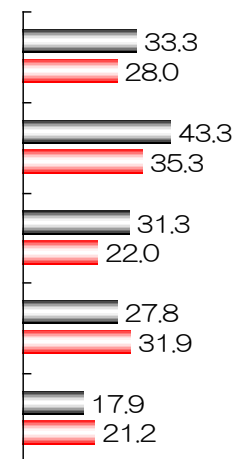
企業に対して教えたくないと思う情報



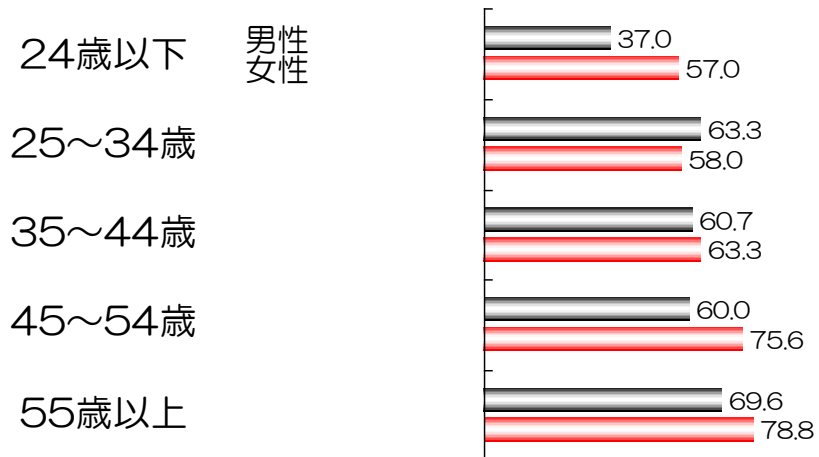
自宅の電話番号



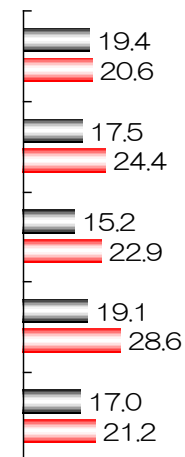
携帯電話の番号



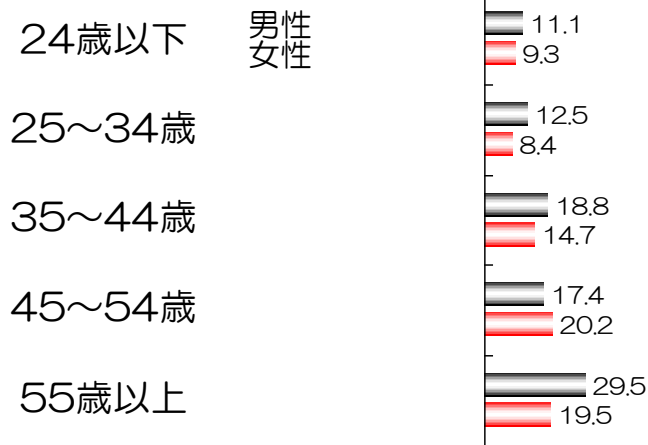
ID番号



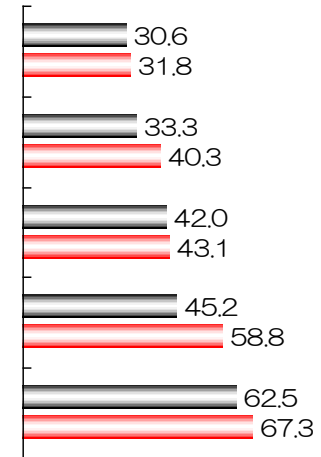
自分の顔写真



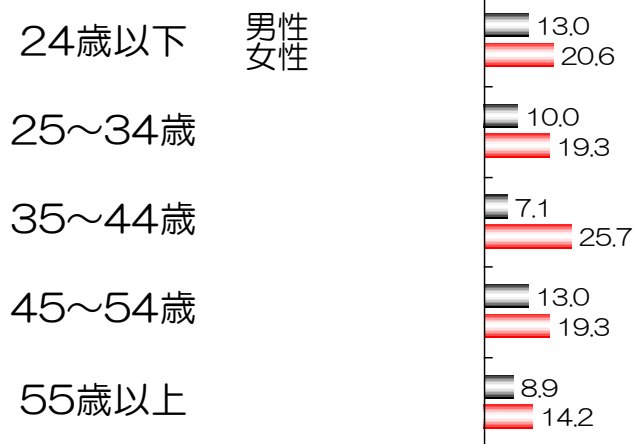
病歴



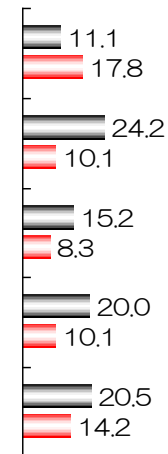
年収や貯金などお金に関する情報



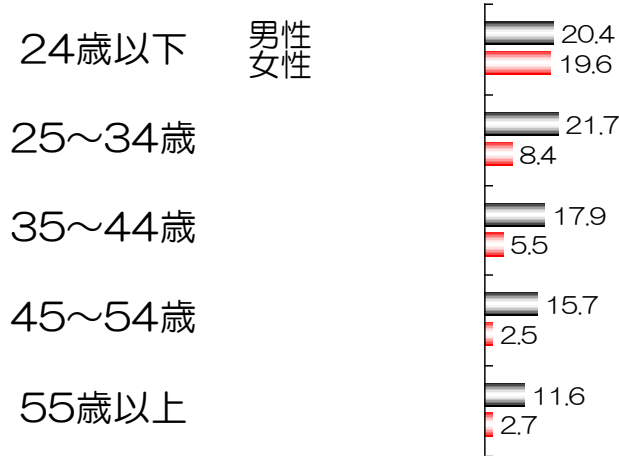
自分が写っている写真や映像



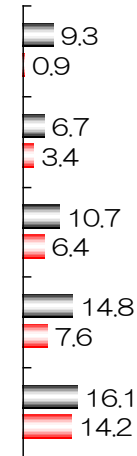
電話やメールなどの通信履歴



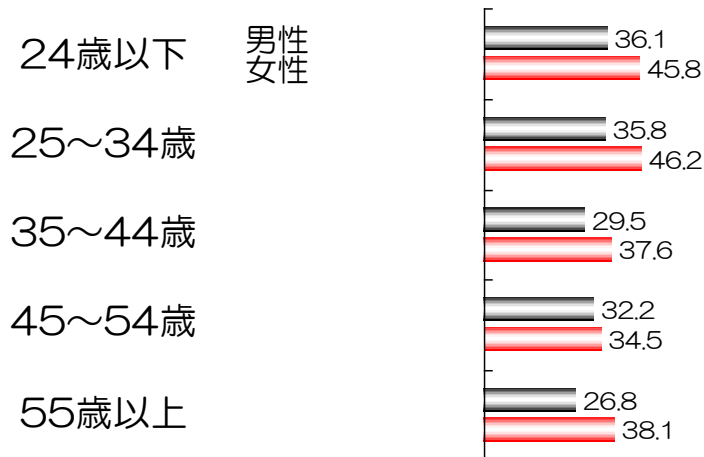
インターネットのホームページ
の閲覧記録



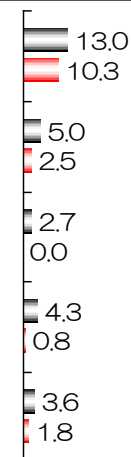
支持している政党や信仰している宗教



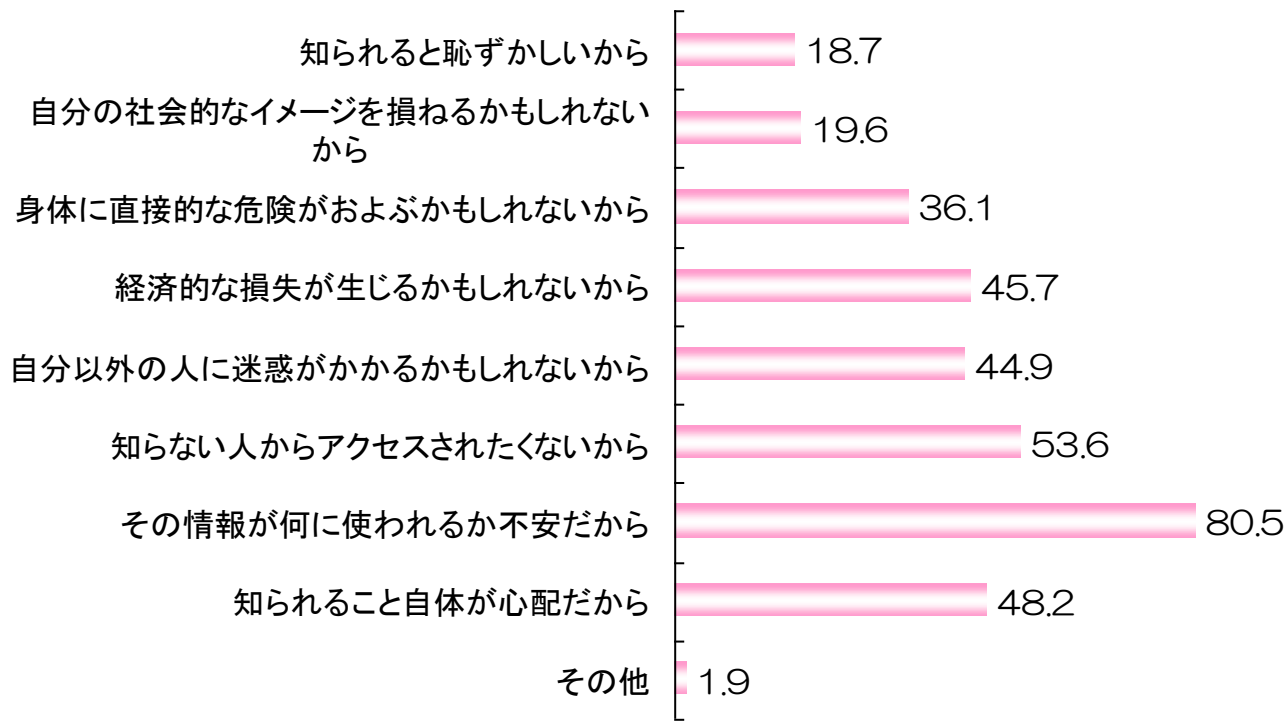
手紙やメール、通話などの通信の内容



ブラウザの「お気に入り」
「ブックマーク」の中身



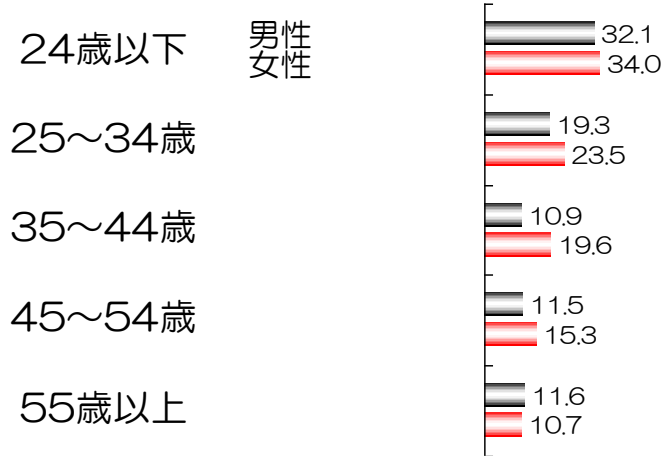
(企業に対して) 教えたくないと思う理由



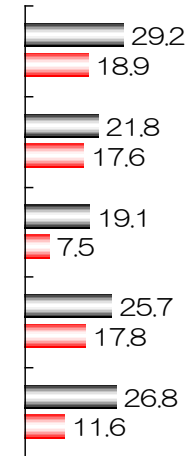
・教えたくない理由としては、具体的な被害に関するものよりも、「その情報が何に使われるか不安だから」という曖昧・漠然とした理由が際立って高い。前問では年収や貯金などの情報に対する開示拒否の姿勢が顕著に見られたが、それに対応すると思われる「経済的な損失」を理由にあげる回答については、必ずしも際立って高い結果にはなっていない。

・この結果から伺えることは、生活者は、見知らぬ企業からのセールスの電話やダイレクトメール、スパムメールなど身近な被害を感じつつも、今後情報化のさらなる進展や社会システムの進化などとともに、まだ想像できないような大きな被害が起り得ることを、最も不安に感じているということである。

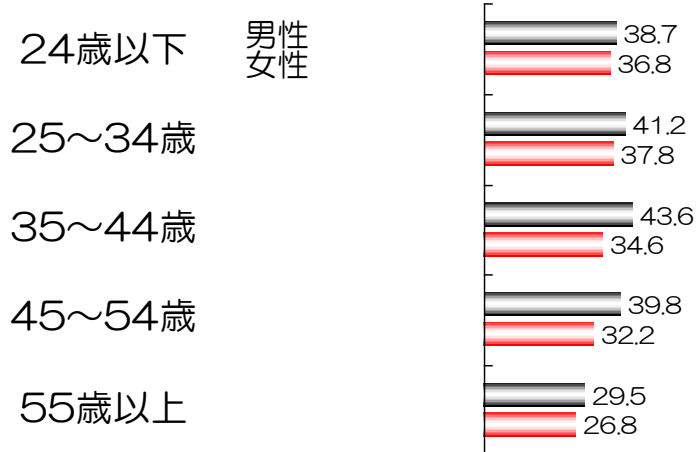
知られると恥ずかしいから



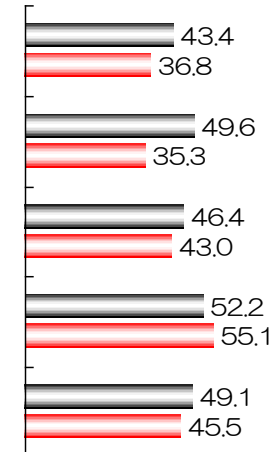
自分の社会的なイメージを損ねるかもしれないから



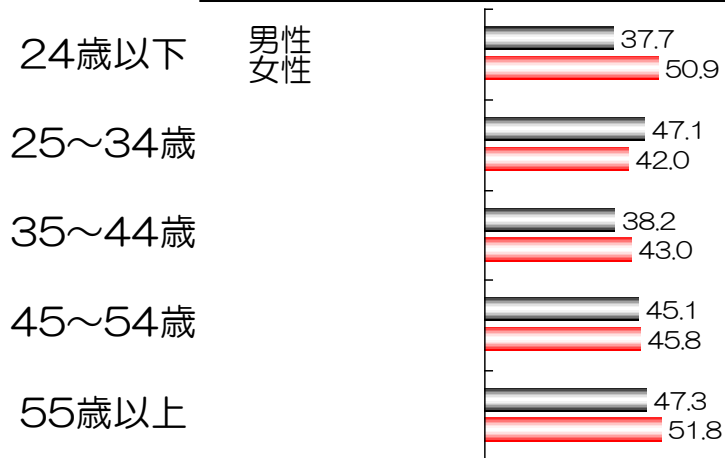
身体に直接的な危険がおよぶかもしれないから



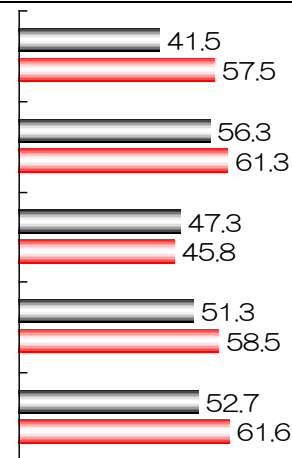
経済的な損失が生じるかもしれないから



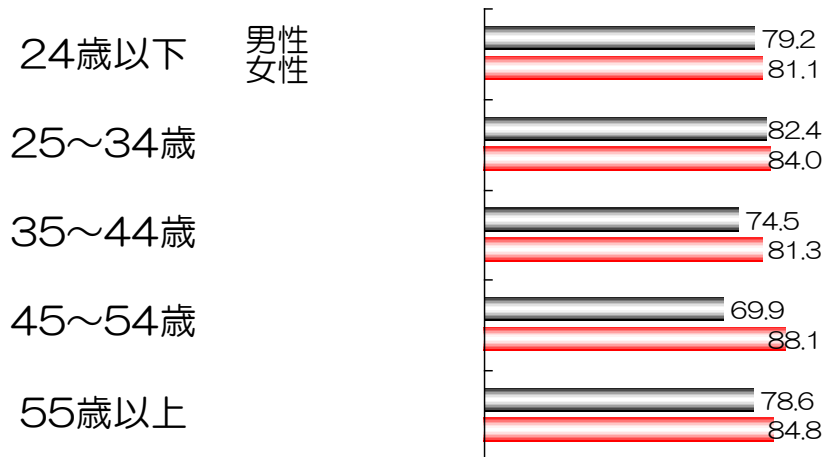
自分以外の人に迷惑がかかる
かもしれないから



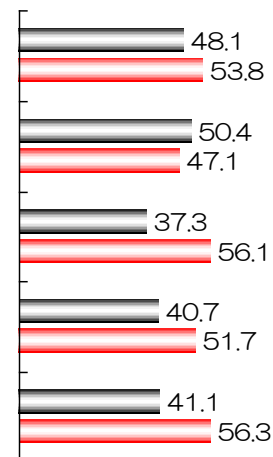
知らない人からアクセスされ
たくないから



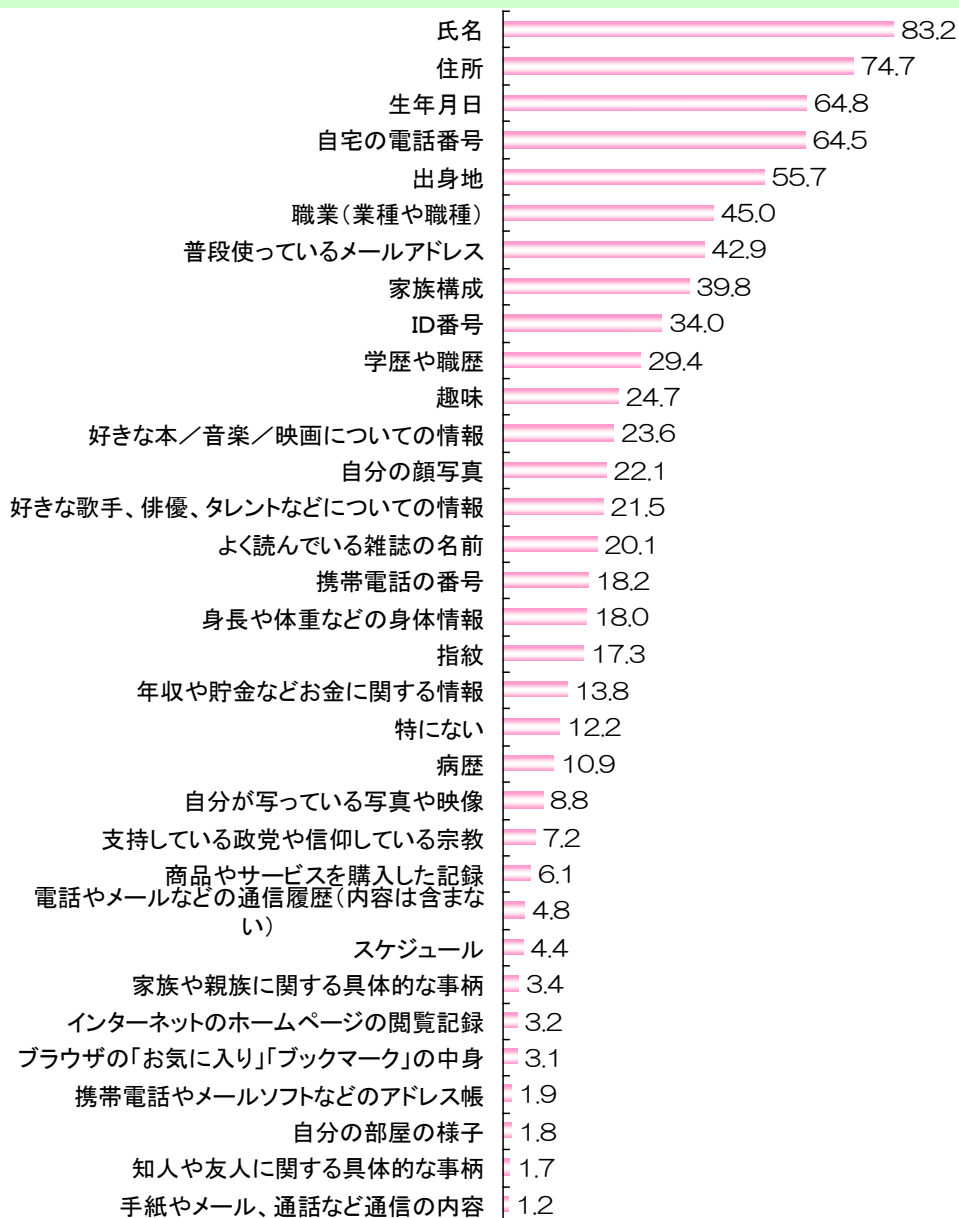
その情報が何に使われるか
不安だから



知られること自体が心配だから



国家や行政機関に対して開示してもよいと思う情報



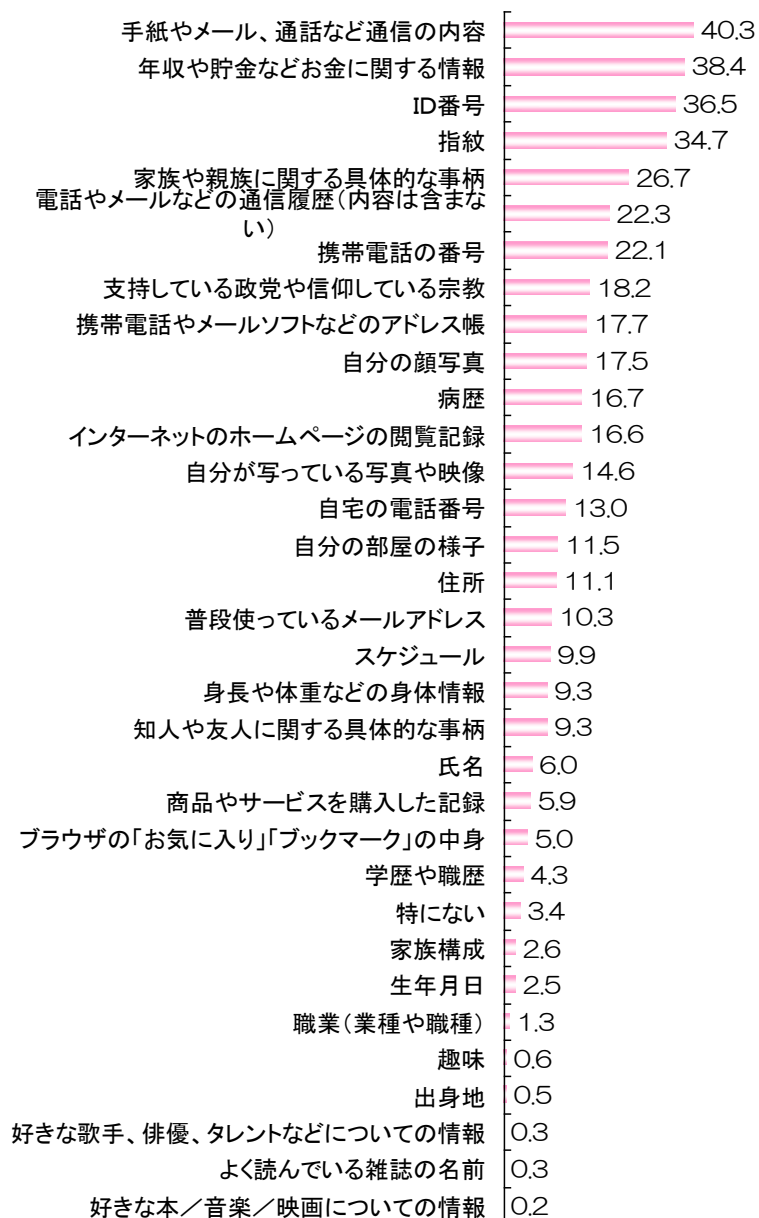
- 氏名や住所、生年月日、電話番号、出身地、職業、メールアドレスといった基本的な個人情報や、家族構成、ID番号、学歴・職歴といった情報、すなわち、既に戸籍・住民票等で行政機関に提出済みと言える情報が上位に並ぶ。

- 行政については、企業や個人に比べ、開示してもよいという割合が全般的に高い。

- ただし、行政に開示してもよい情報が「特にない」との回答の割合も12%に上っている。

- 趣味関連の情報については、企業や個人に比べて、行政に開示してもよいという割合が低い。

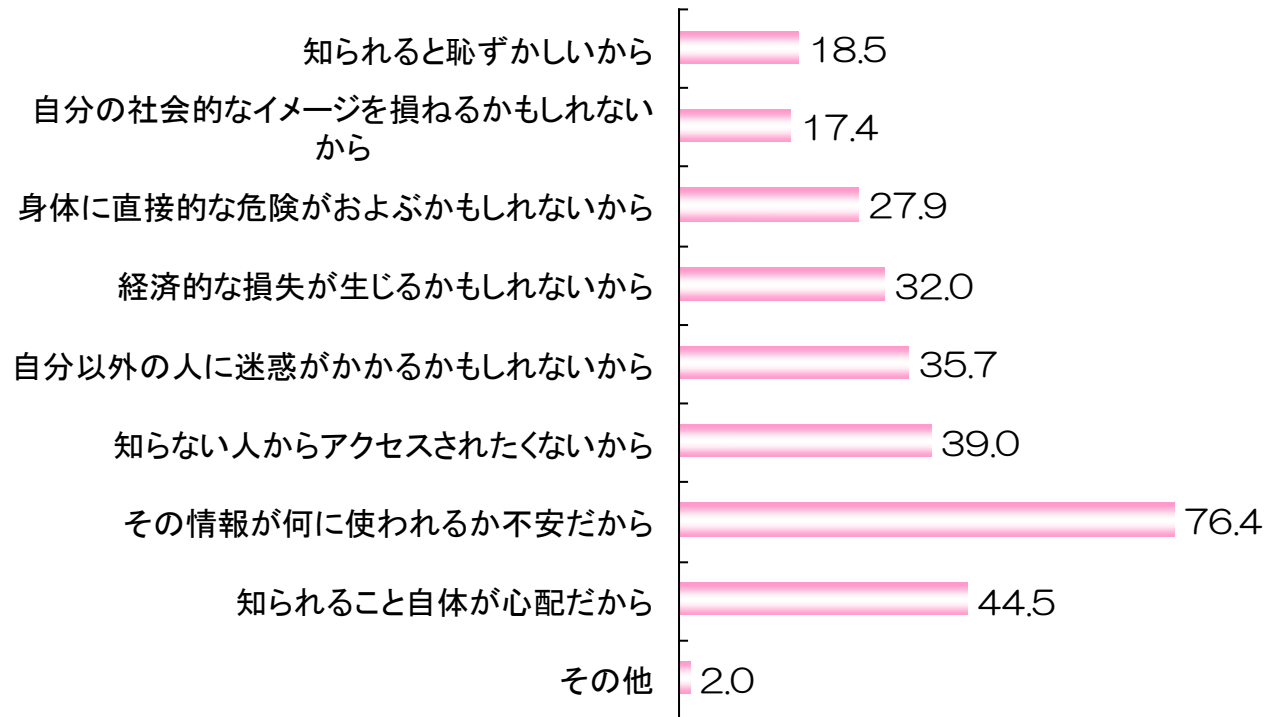
国家や行政機関に対して教えたくないと思う情報



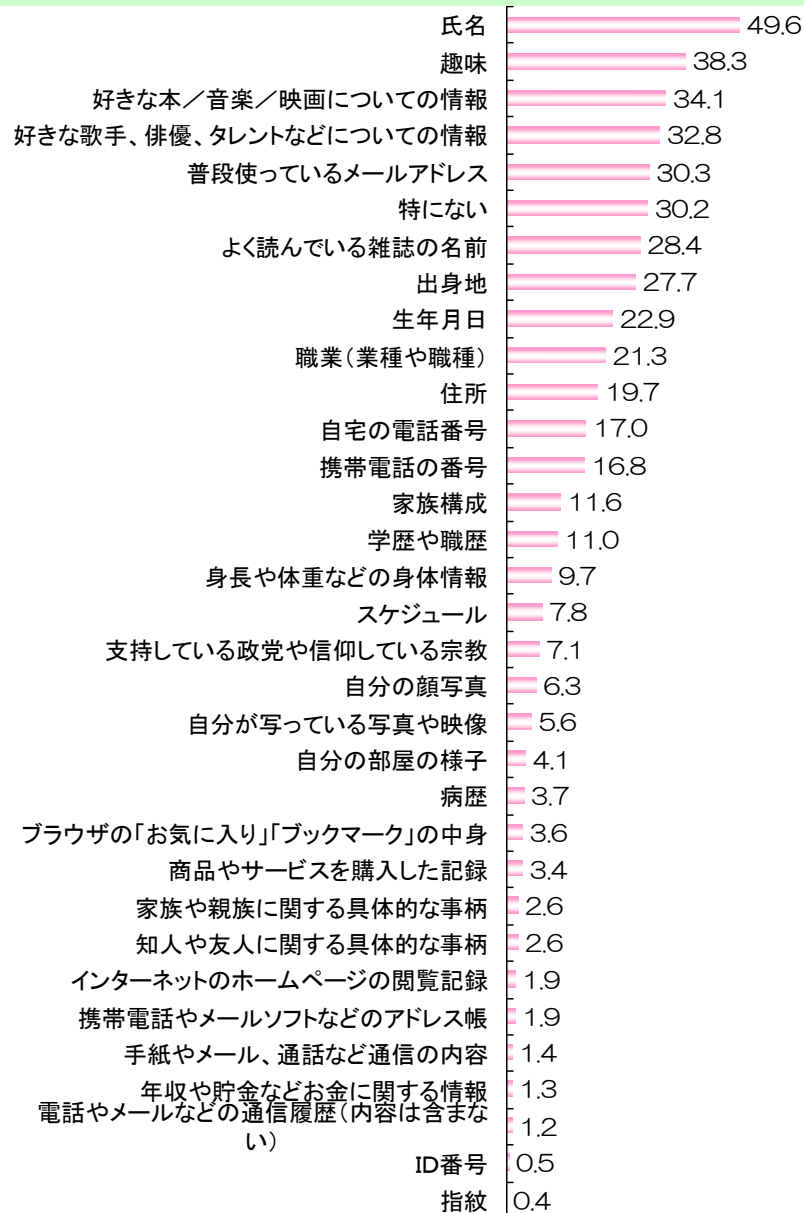
・国家や行政機関に対しては、通信の内容、通信履歴といった通信の秘密に関わる情報項目や、支持政党や宗教といった信教の自由に関わる情報が上位に来たことが特徴的。

・年収等のお金に関する情報や、住民票コード、免許証番号、保険証番号等のID番号など、すでに行政機関に開示しているはずの情報についても、4割近い人が「教えたくない」と回答。

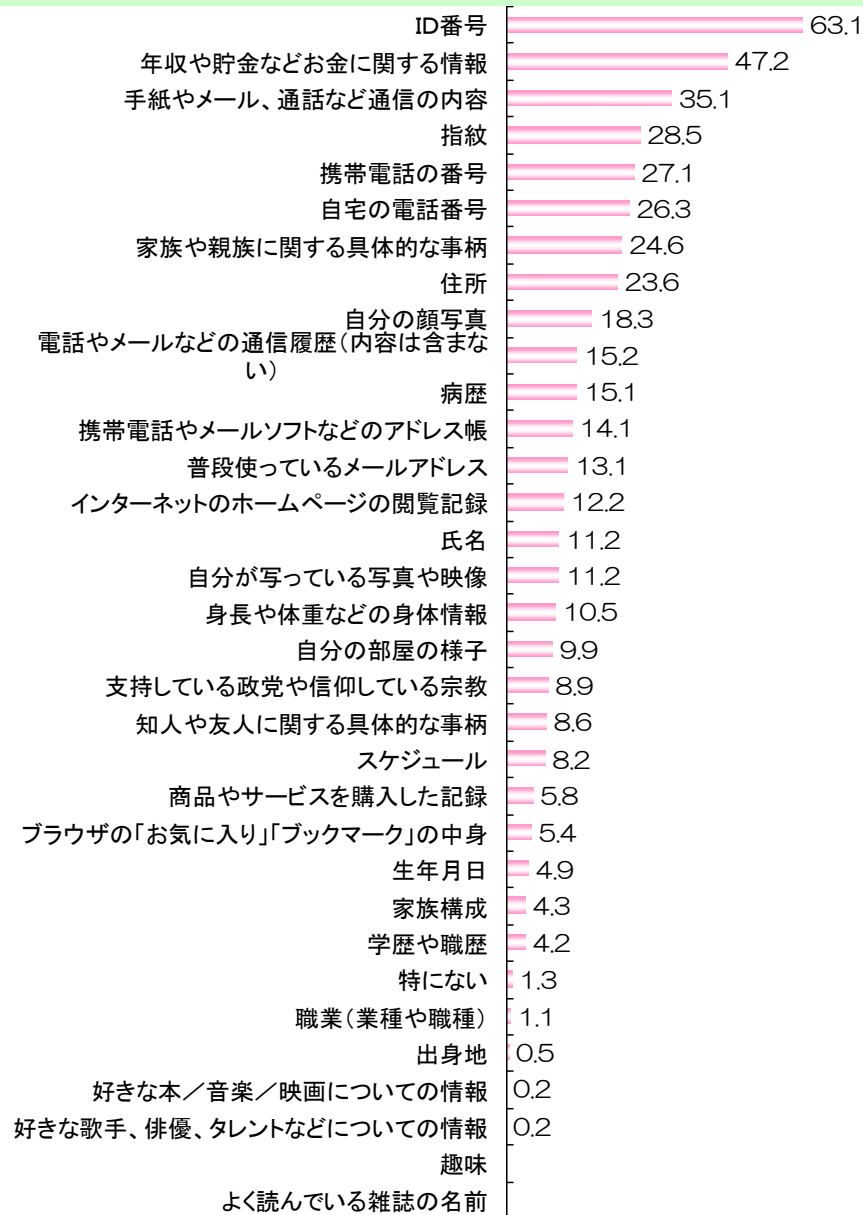
(国家や行政機関に対して) 教えたくないと思う理由



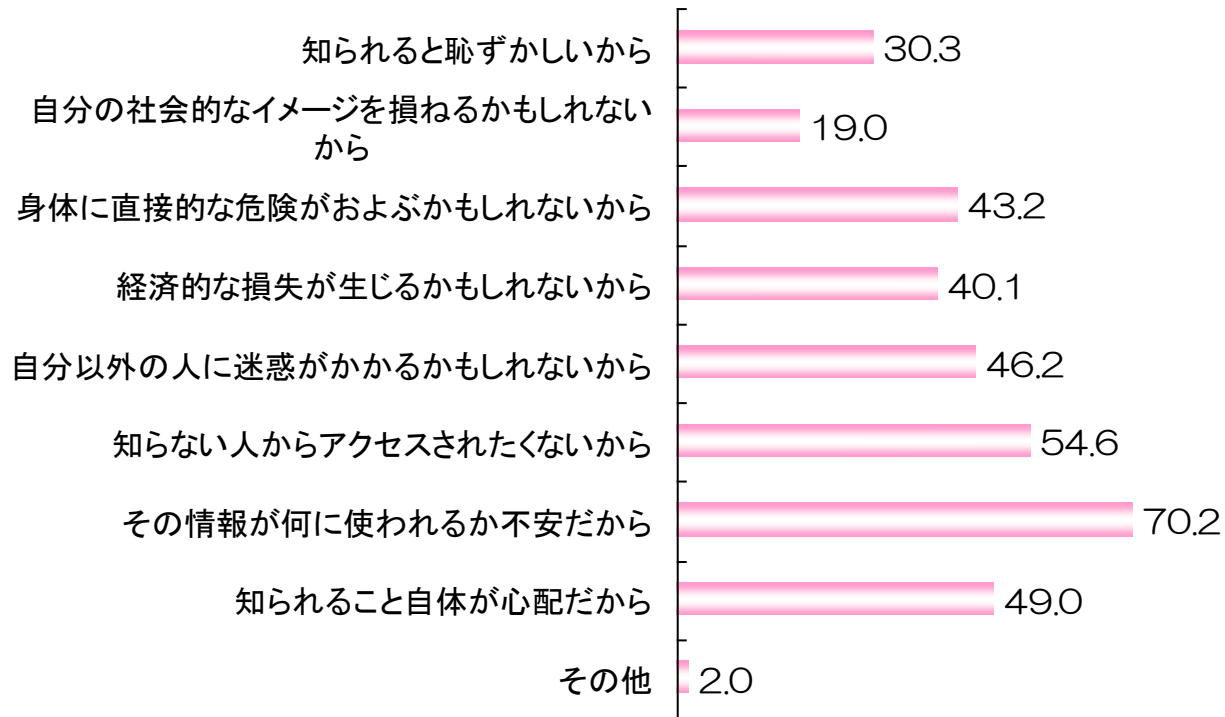
個人に対して開示してもよいと思う情報



個人に対して教えたくないと思う情報



(個人に対して) 教えたくないと思う理由



Ⅲ. 身近な人は知らない個人的な事柄

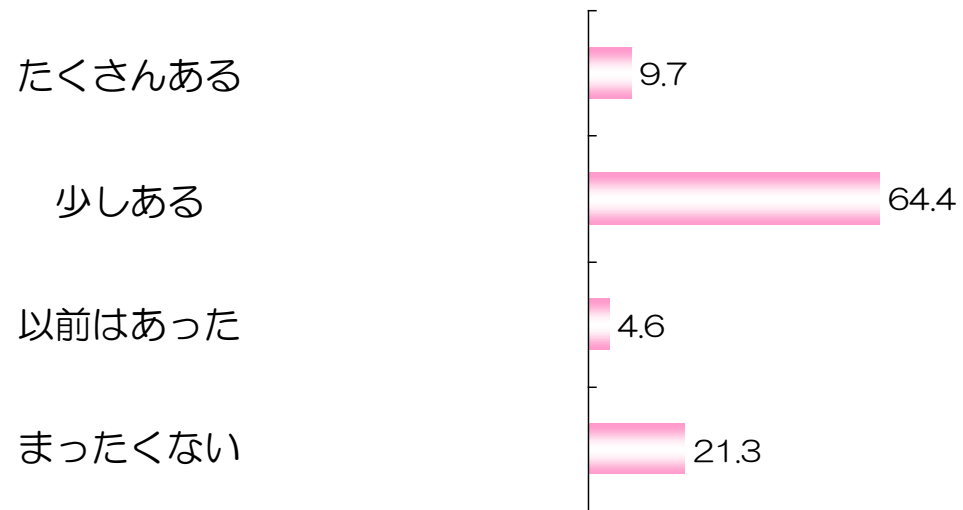
●生活者は、家族や友人など近しい人には積極的に知らせていない、個人的な事柄（すなわち個人的な秘密）をどのくらい持っているのか？

それは、どのような内容か？

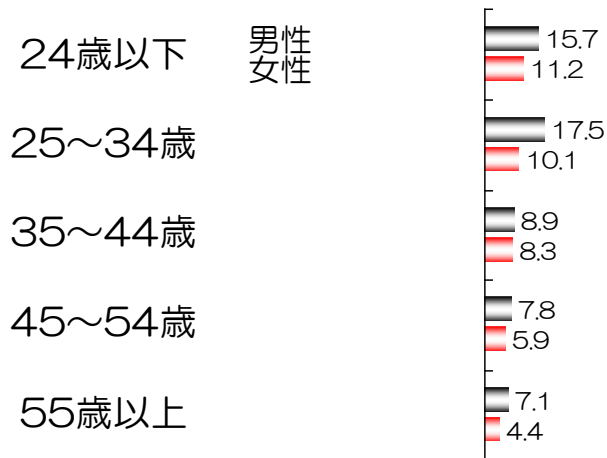
●そうした個人的な事柄に関連して、インターネットや携帯電話を活用しているのか？

活用する理由は？

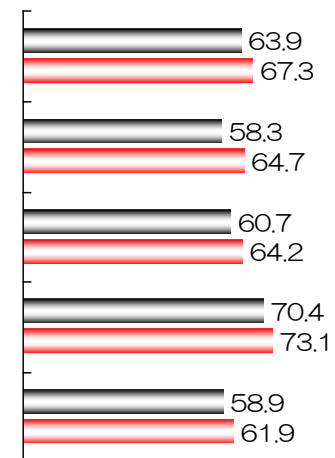
家族や友人など身近な人に積極的に知らせていない個人的な事柄



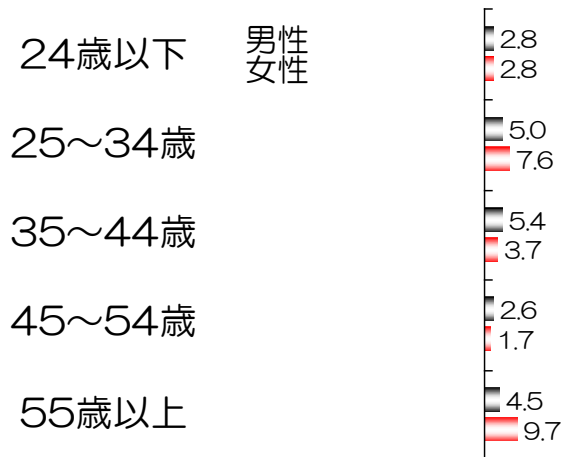
たくさんある



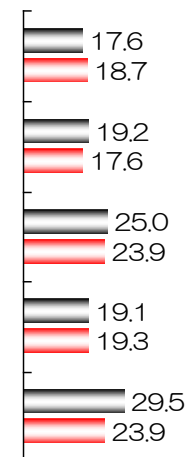
少しある



以前はあった

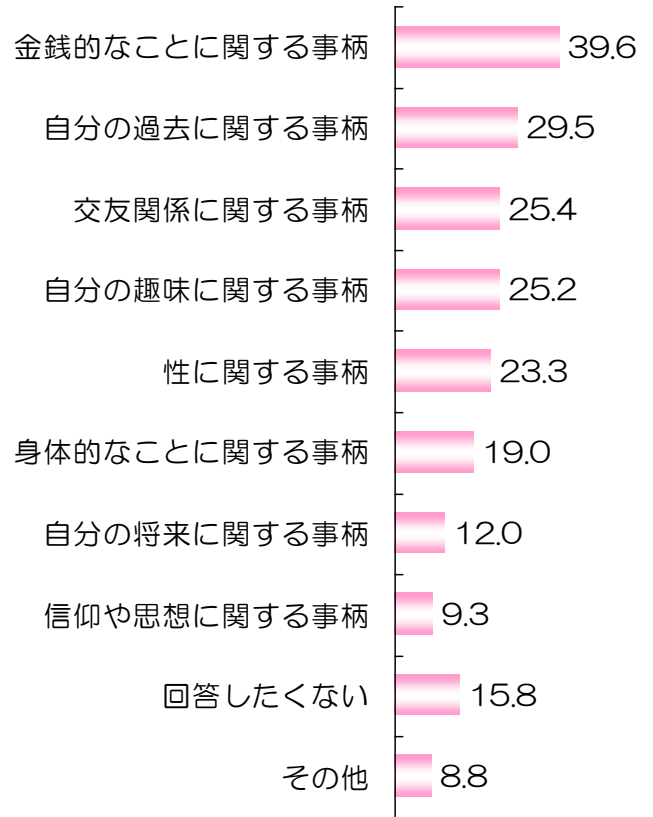


まったくない



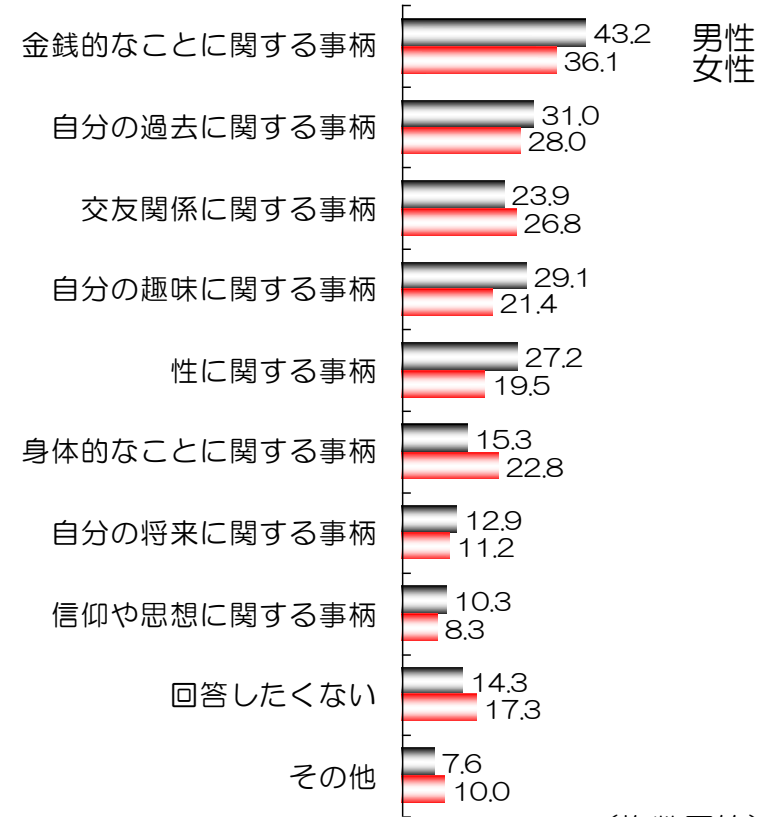
個人的な事柄の具体的内容

全体



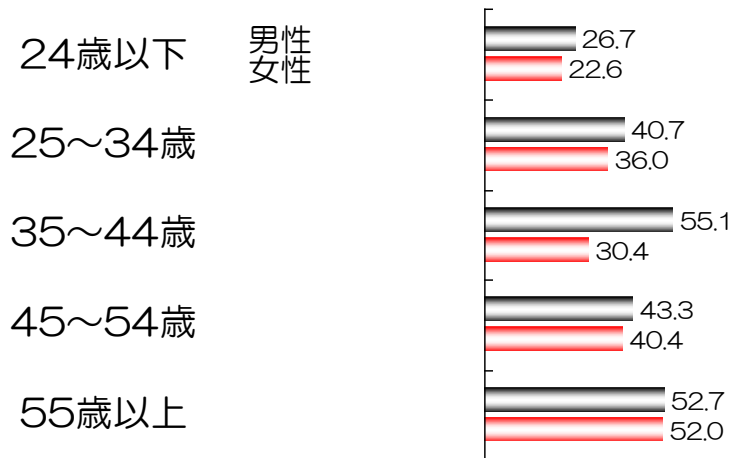
(複数回答)

男女別

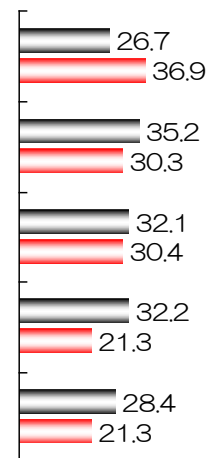


(複数回答)

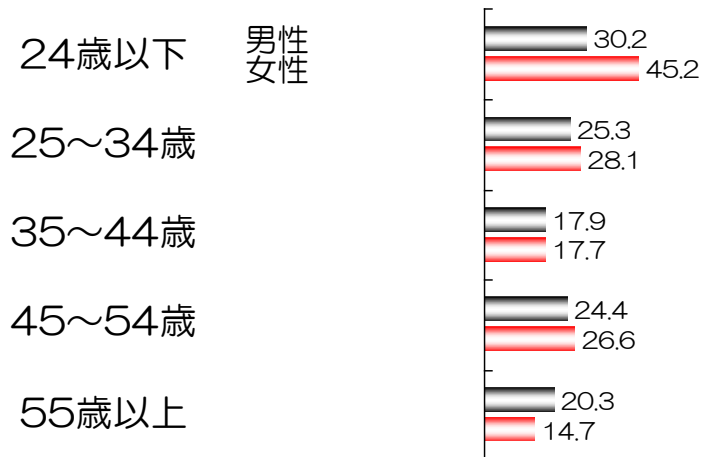
金銭的なことに関する事柄



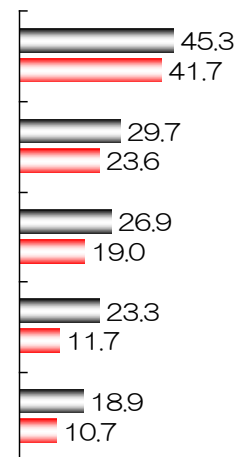
自分の過去に関する事柄



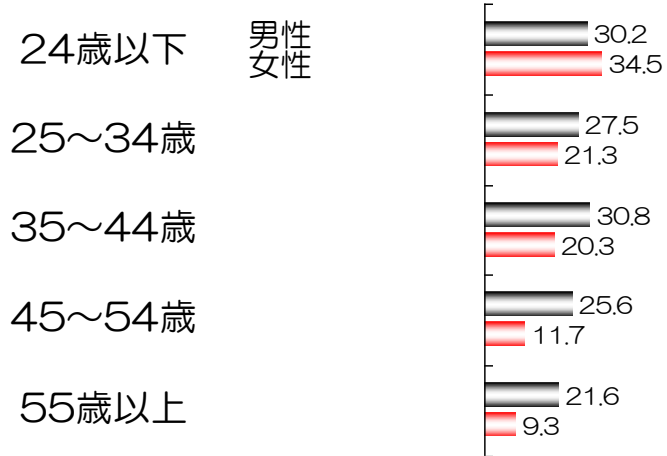
交友関係に関する事柄



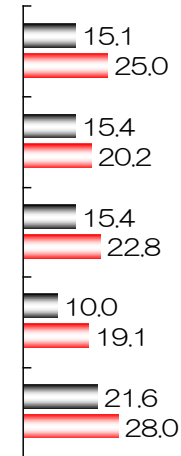
自分の趣味に関する事柄



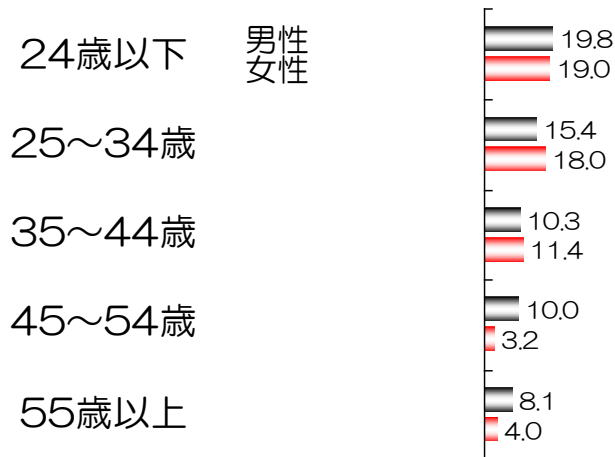
性に関する事柄



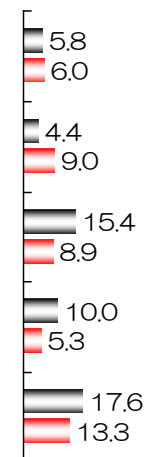
身体的なことに関する事柄



自分の将来に関する事柄

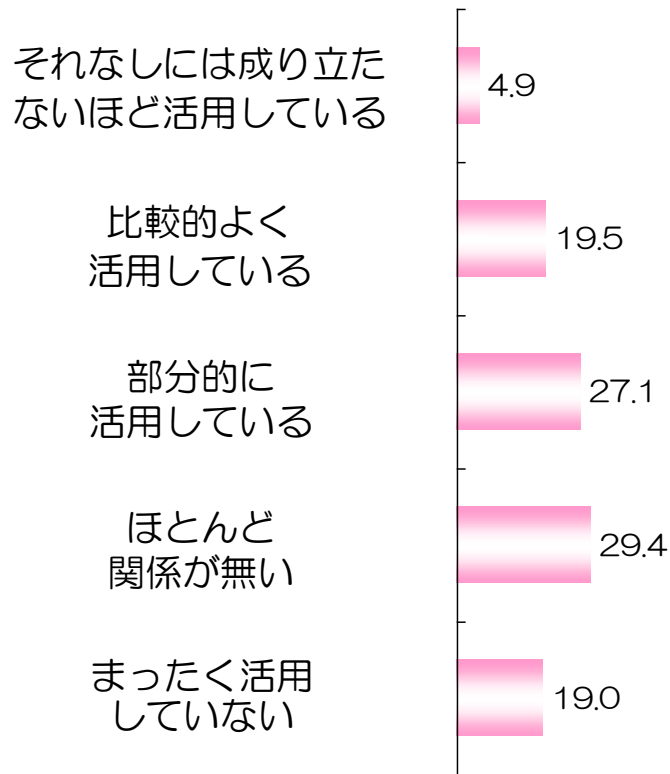


信仰や思想に関する事柄

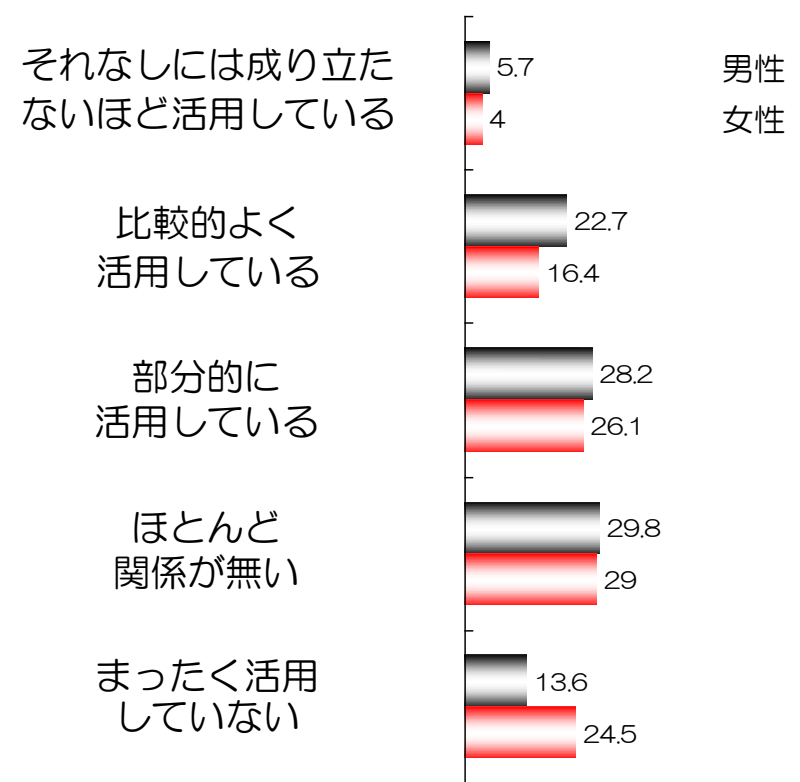


個人的な事柄に関連したインターネットや携帯電話の活用

全体

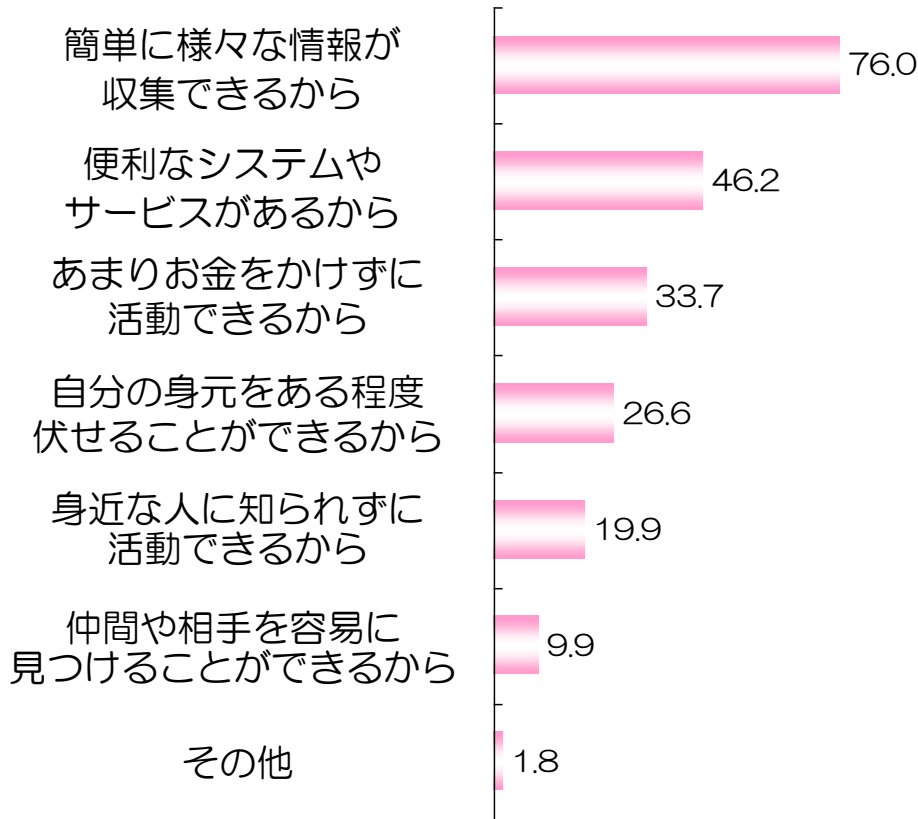


男女別

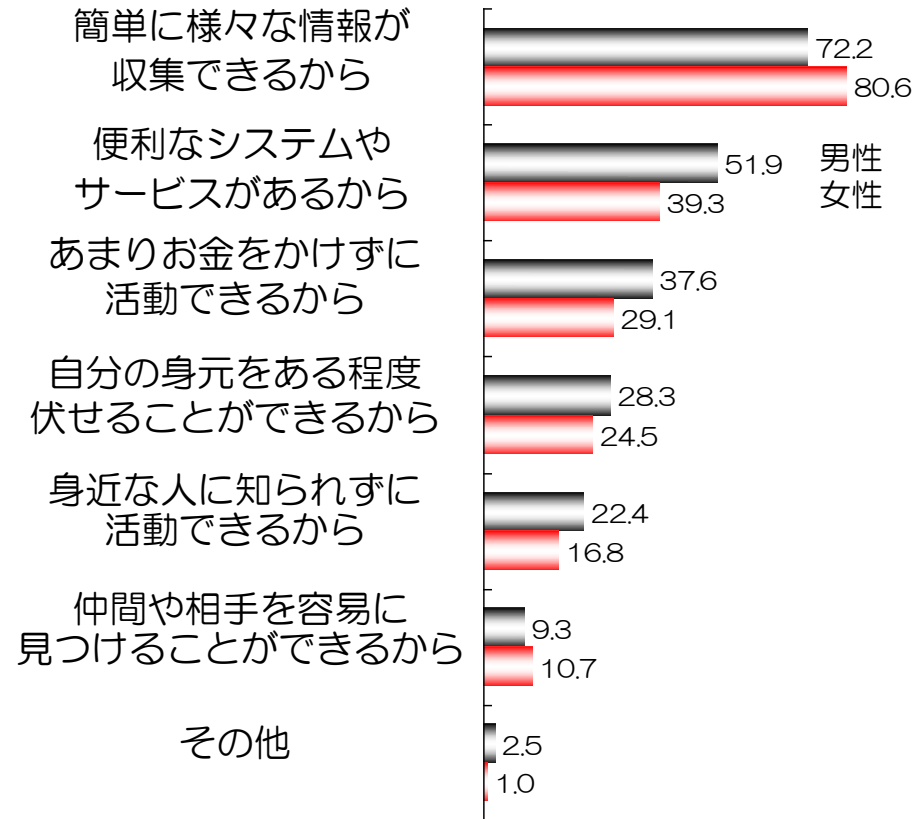


インターネットや携帯電話を活用する理由

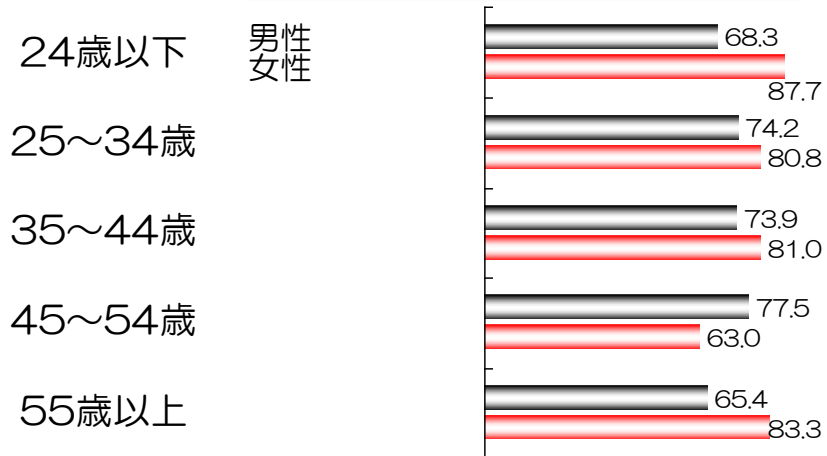
全体



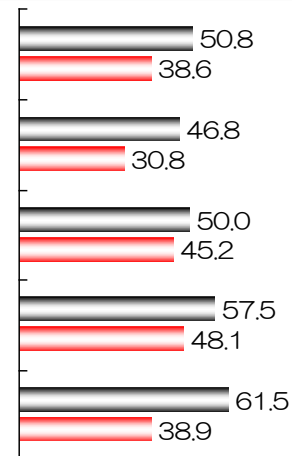
男女別



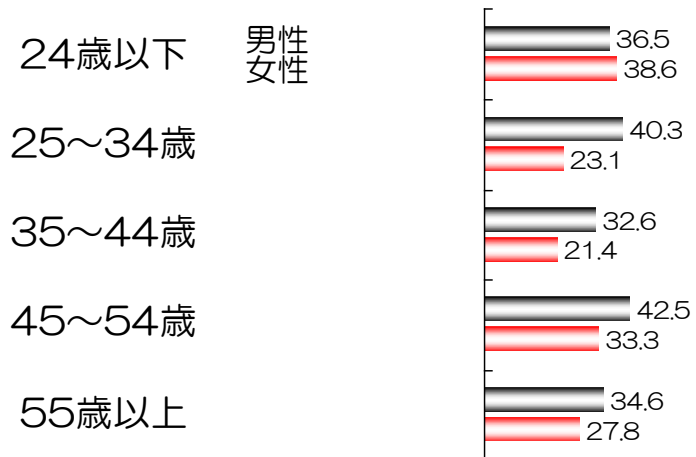
簡単に様々な情報が
収集できるから



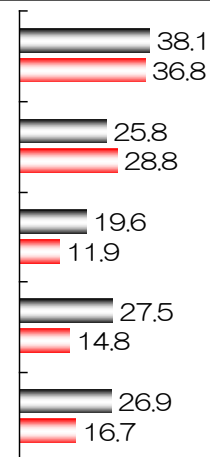
便利なシステムや
サービスがあるから



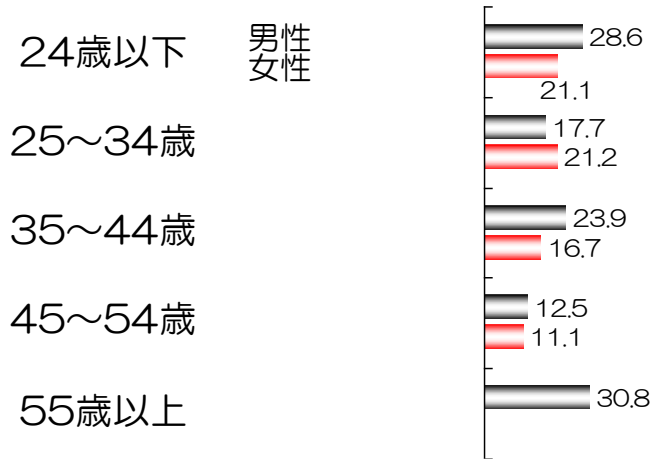
あまりお金をかけずに
活動できるから



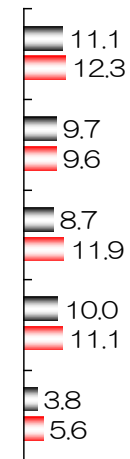
自分の身元をある程度
伏せることができるから



身近な人に知られずに活動できるから



仲間や相手を容易に見つけることができるから



IV. 日常生活におけるプライバシー被害と加害 ～～個人間のプライバシー侵害～～

●インターネットの利用普及とIT機器の機能高度化に伴う、生活者の役割変化

情報の「受け手」としての立場が中心 ⇒ 情報の「出し手」「取り手」としての役割の向上

ex. インターネット掲示板、ブログ、ソーシャルネット

ex. デジカメ写真、携帯カメラ写真、（盗撮画像）

●こうした側面において、個人がインターネットなどのITを通じて、他人のプライバシーに対する覗き見的な興味を満足させることの敷居が低くなっている。

●「企業対個人」「行政対個人」という従来型の個人情報／プライバシー保護の問題ではなく、むしろ「個人対個人」というインターネット社会に特有の側面に根ざす問題。

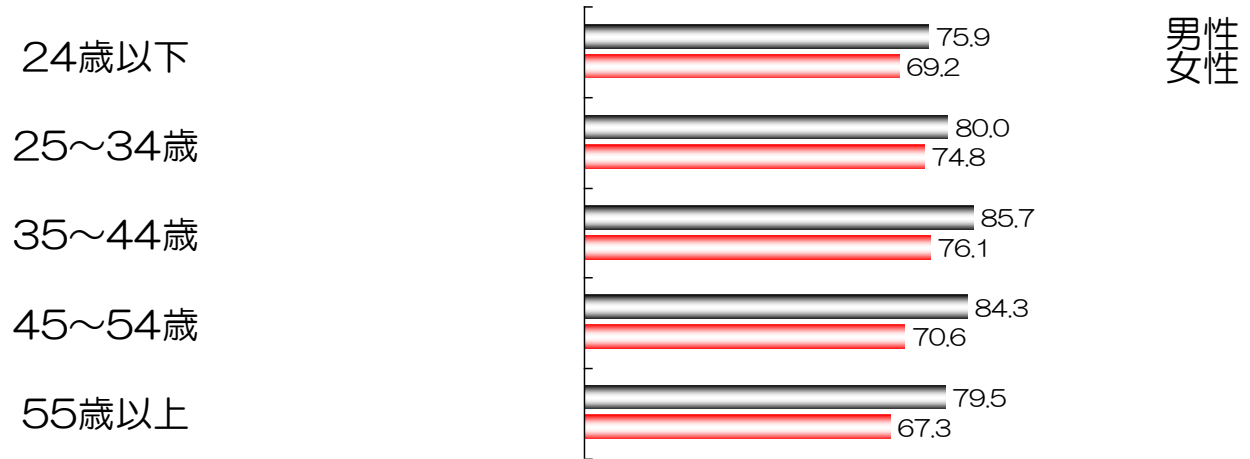
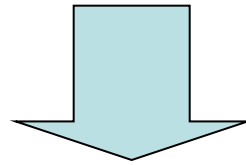
●無論この種の問題は、立ち聞きや覗き見、隠し撮りといった手法に代表されるように以前からあった問題であるが、高度なIT機器が広く普及した今日における状況においては、侵害に至る敷居がいっそう低く、また被害の面でも、インターネットを通じてデジタルデータという形で瞬く間に流通することから、問題は複雑化している。

●このような「個人対個人」間におけるプライバシー侵害的な場合について、生活者がIT機器を利用する局面を中心に、先ず自分が他人から画面を覗き見されたり、知らない間に機器のデータを盗み見されたり機器を操作されるなどの、被害経験あるいは被害意識の有無について行った。

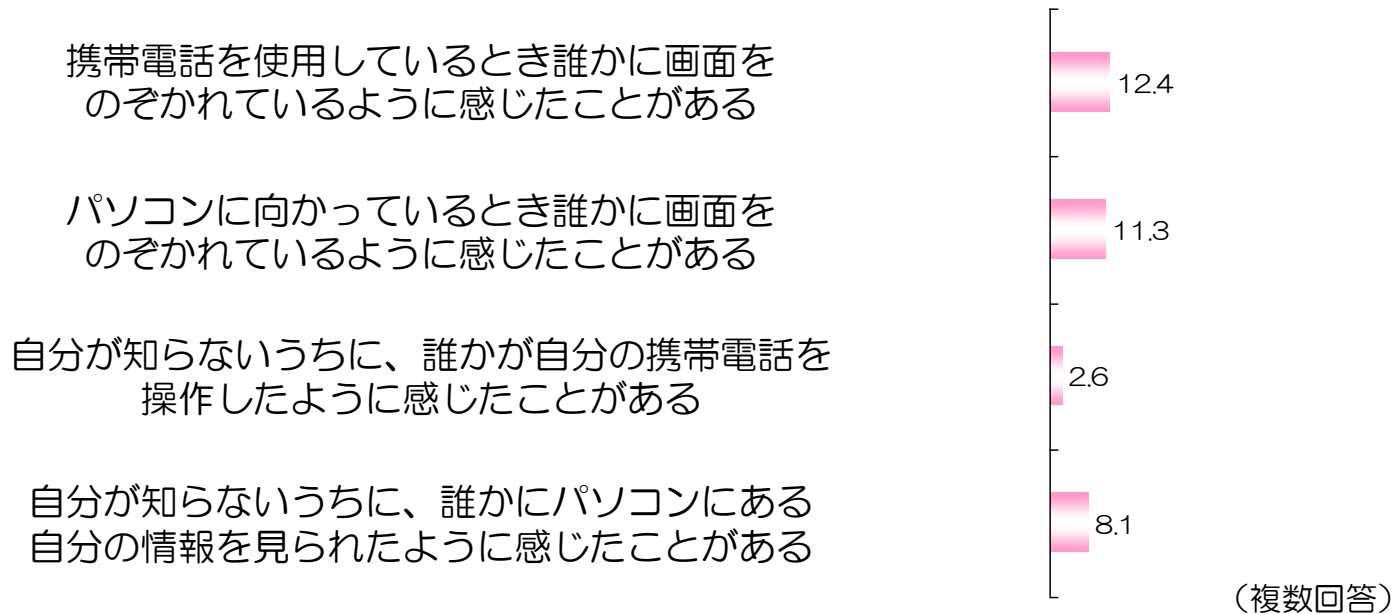
そして次に、逆の立場でそうしたことを自分が他人に対して行ったことがあるかという、加害経験の有無について問うてみた。

知らない人からのアクセス経験

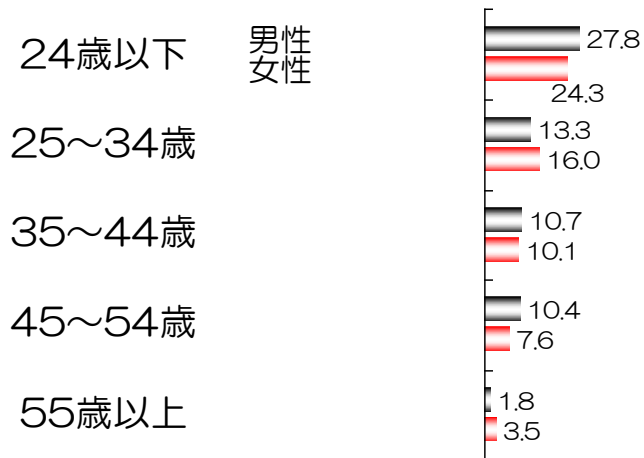
知らない相手から
アクセスされた経験がある



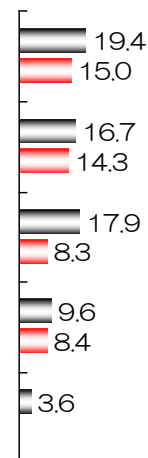
携帯電話やパソコンを使用中に背後からのぞかれたり 知らない間に操作されたりした経験



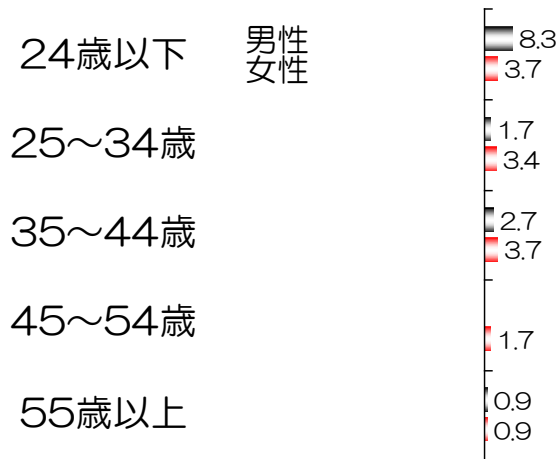
携帯電話を使用しているとき誰かに画面をのぞかれているように感じたことがある



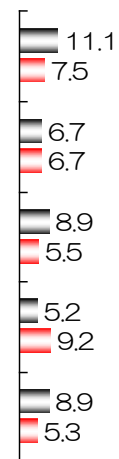
パソコンに向かっていているとき誰かに画面をのぞかれているように感じたことがある



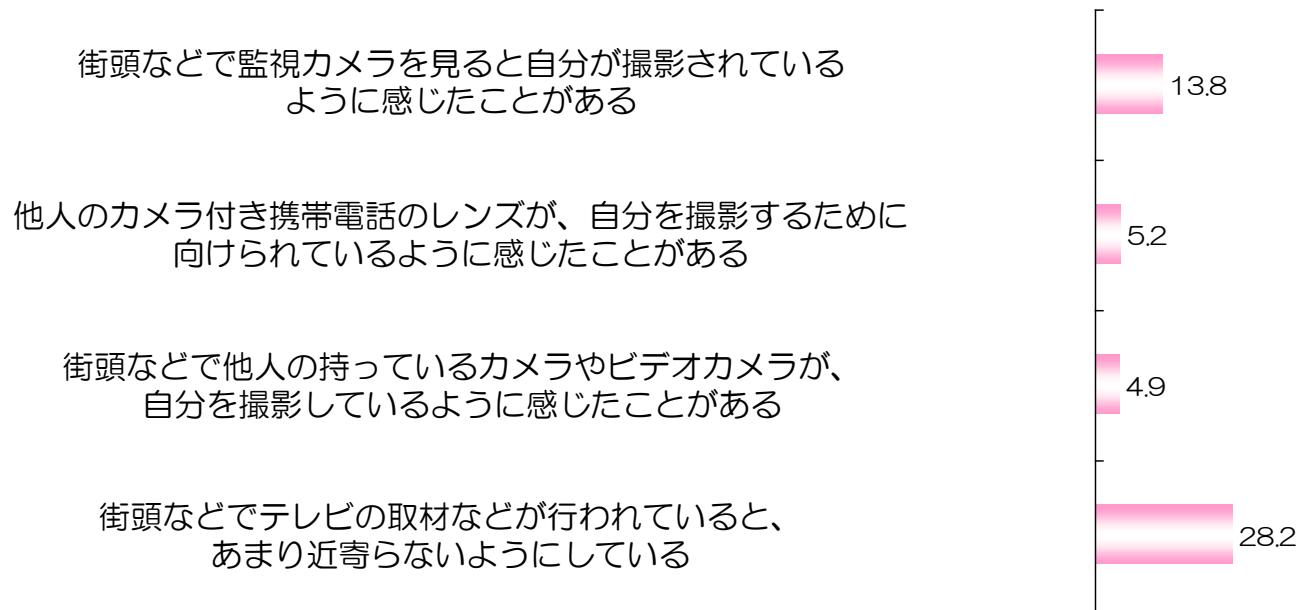
自分が知らないうちに、誰かが自分の携帯電話を操作したように感じたことがある



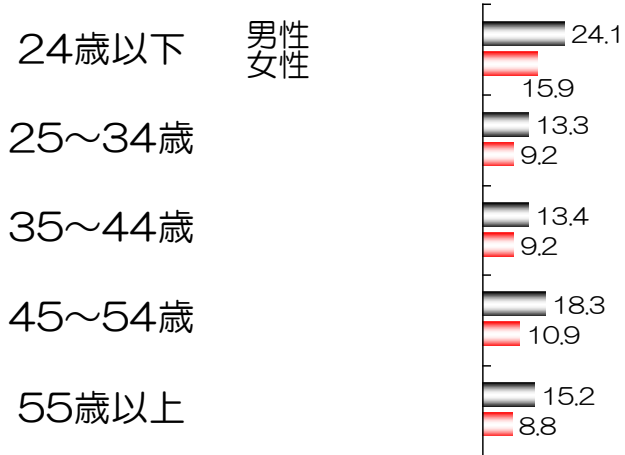
自分が知らないうちに、誰かにパソコンにある自分の情報を見られたように感じたことがある



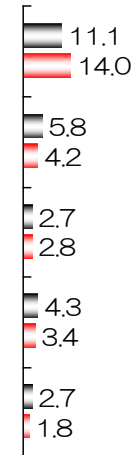
カメラが自分を見ている・・・



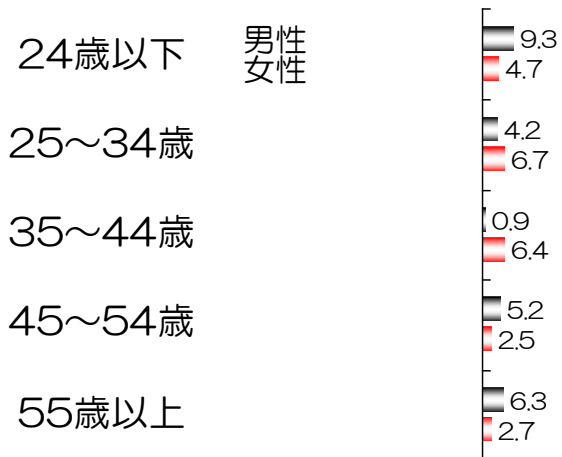
街頭などで監視カメラを見ると自分が撮影されているように感じたことがある



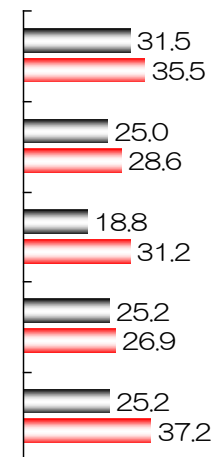
他人のカメラ付き携帯電話のレンズが、自分を撮影するために向けられているように感じたことがある



街頭などで他人の持っているカメラやビデオカメラが、自分を撮影しているように感じたことがある



街頭などでテレビの取材などが行われていると、あまり近寄らないようにしている



家の中をのぞかれたり部屋に侵入されたりした経験

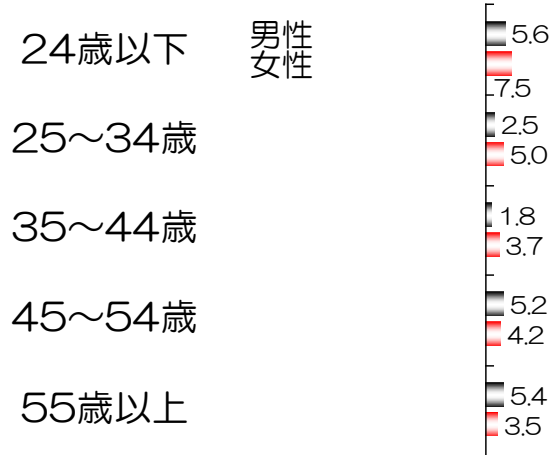
自宅にいるときに、誰かに家の中をのぞかれている
ように感じたことがある

4.4

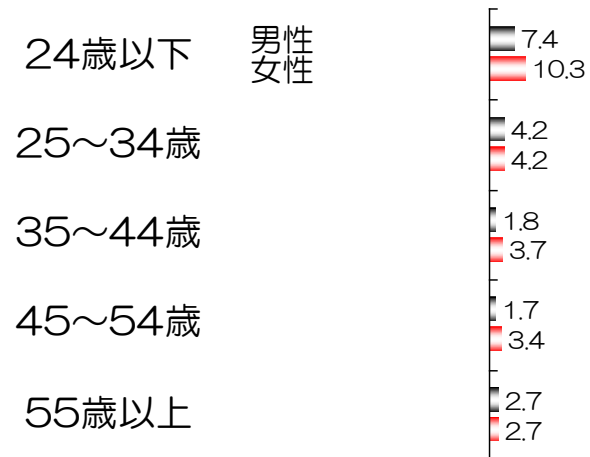
自分が知らないうちに、誰かが自分お部屋に
入ったように感じたことがある

4.1

自宅にいるときに、誰かに家の中をのぞかれて
いるように感じたことがある

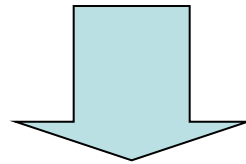
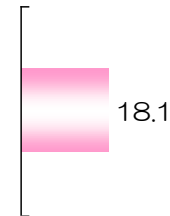


自分が知らないうちに、誰かが自分お部屋に
入ったように感じたことがある

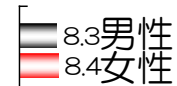


他人の情報への関心

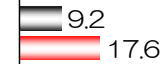
他人の情報には興味が無い



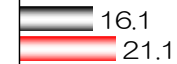
24歳以下



25～34歳



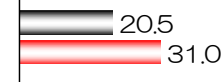
35～44歳



45～54歳



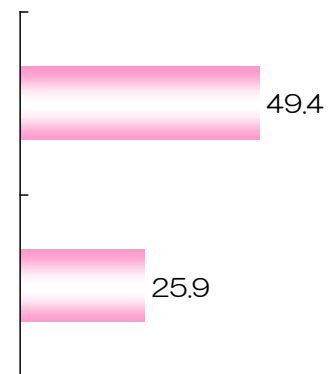
55歳以上



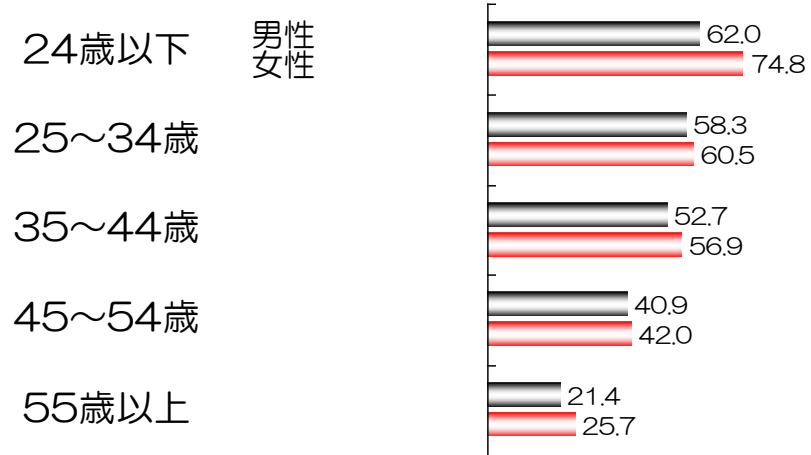
インターネットで他人に関する情報を調べる

インターネットの掲示板などで
有名人の情報を調べたことがある

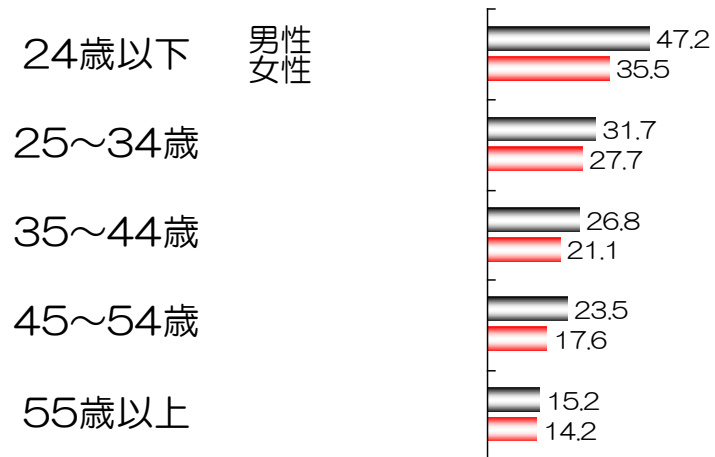
インターネットの検索サイトで
知人や友人に関する情報を調べたことがある



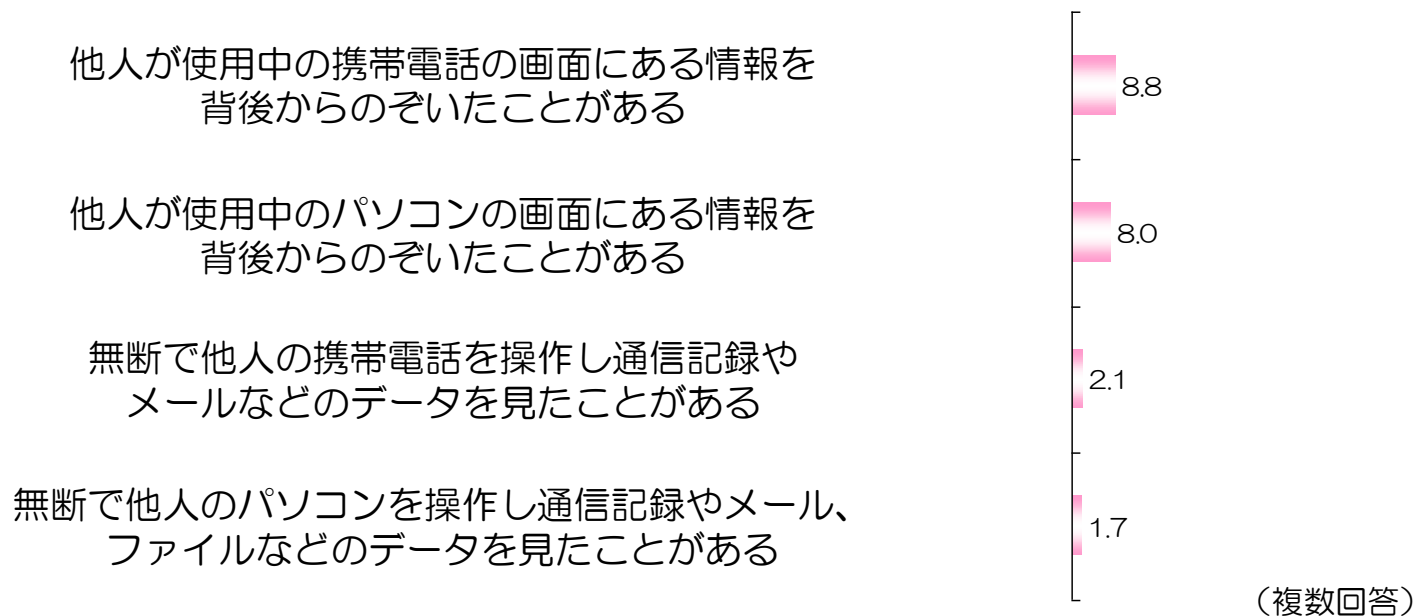
インターネットの掲示板などで
有名人の情報を調べたことがある



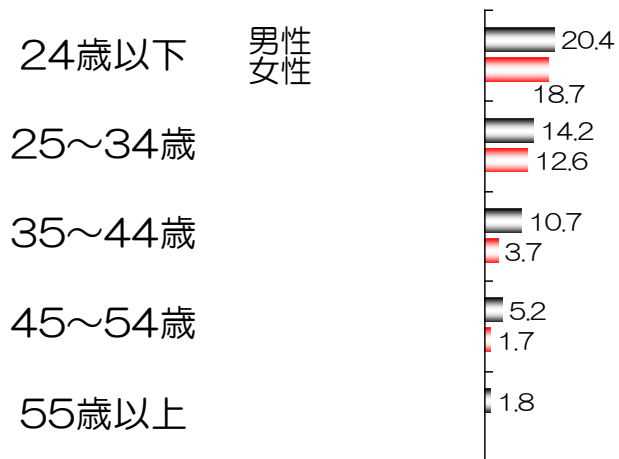
インターネットの検索サイトで
知人や友人に関する情報を調べたことがある



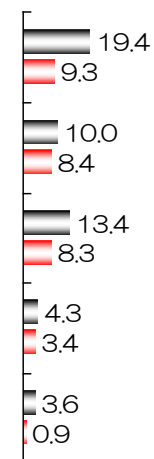
他人の携帯電話やパソコンを使用中に背後からのぞいたり 本人に無断で操作したりした経験



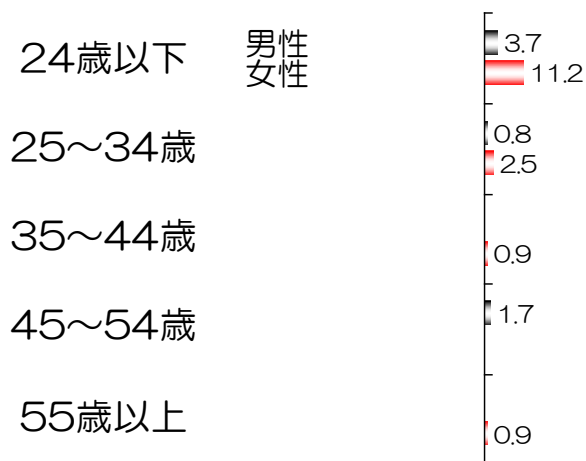
他人が使用中の携帯電話の画面にある情報を
背後からのぞいたことがある



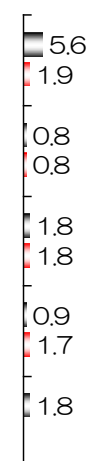
他人が使用中のパソコンの画面にある情報を
背後からのぞいたことがある



無断で他人の携帯電話を操作し通信記録や
メールなどのデータを見たことがある



無断で他人のパソコンを操作し通信記録やメール、
ファイルなどのデータを見たことがある



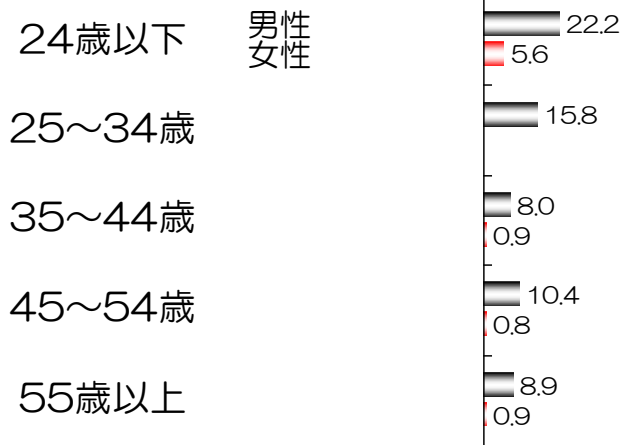
隠し撮り

知らない人を隠し撮りした写真や映像を
それとわかって見たことがある

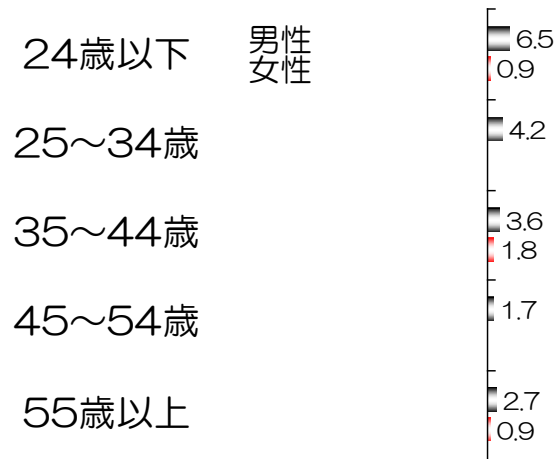
知らない人の写真や映像を
本人に断りなく撮影したことがある



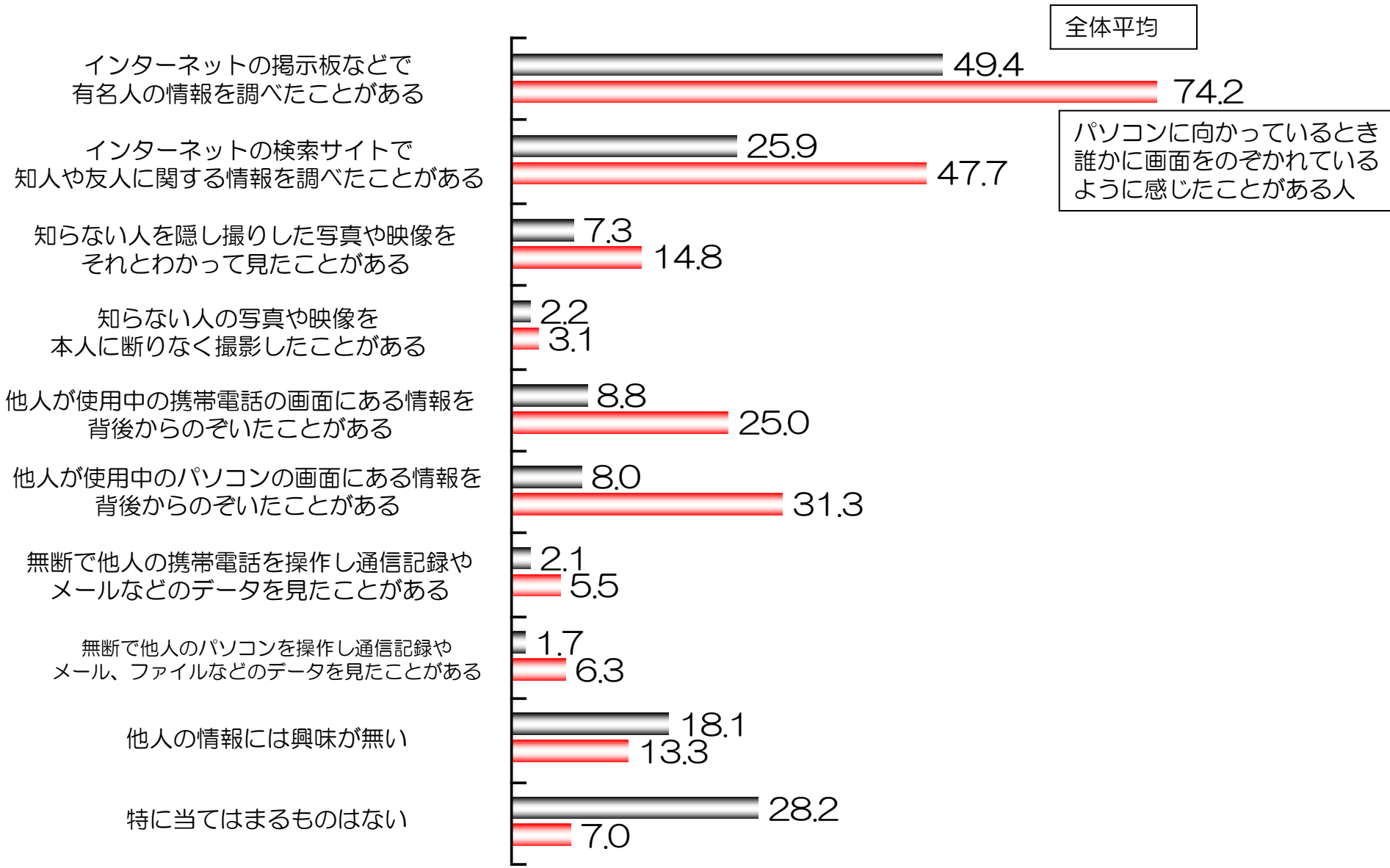
知らない人を隠し撮りした写真や映像を
それとわかって見たことがある



知らない人の写真や映像を
本人に断りなく撮影したことがある



プライバシー被害と加害の関係



V. 利用サービス別にみた分析

●本調査ではさらに、回答者の属性として下記のような様々なインターネットサービスの利用経験に着目し、それらの利用経験別に見られる特徴的な回答傾向について分析も行った。

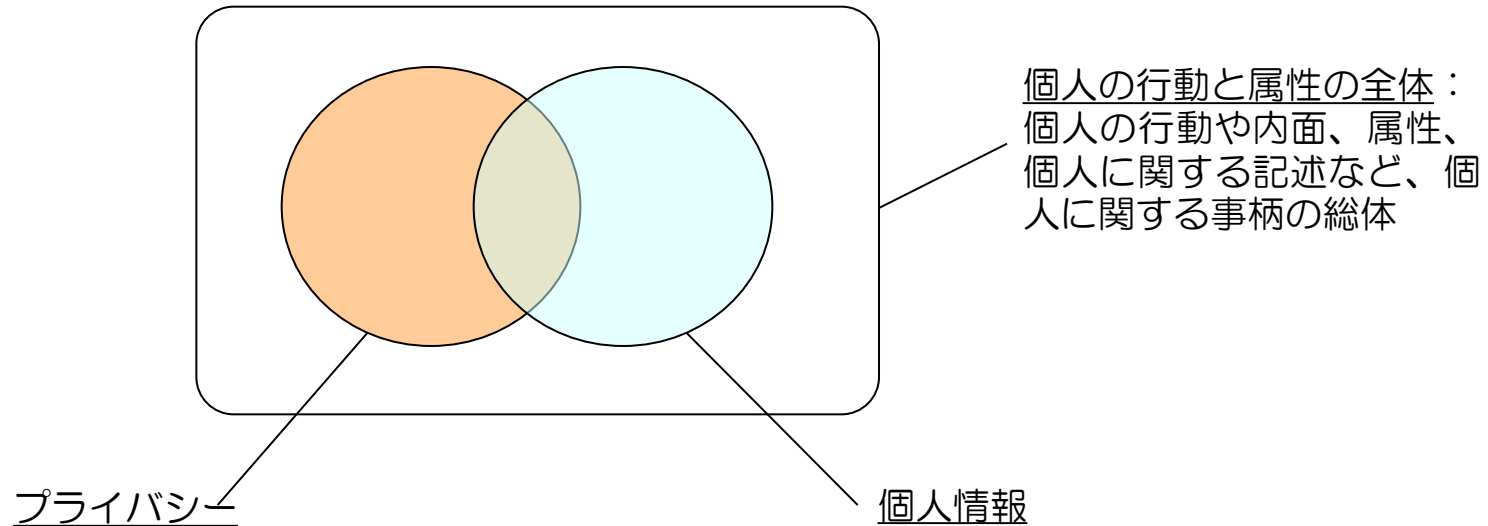
- ①インターネット掲示板書き込み経験者
- ②個人ホームページやメルマガ発行経験者
- ③ソーシャルネットワーキングサービス利用経験者
- ④出会い系サイト利用経験者
- ⑤インターネット動画配信サービス利用者
- ⑥オンラインゲーム利用者

●本資料では、割愛する。

VI. まとめと考察

個人情報とプライバシーの関係に関するモデル

●「個人情報とプライバシーの関係に関するモデル」



●外枠の四角の内部が「個人の行動と属性の全体」。これは、個人の行動や内面、属性、個人に関する記述など、個人に関する事柄の総体である。

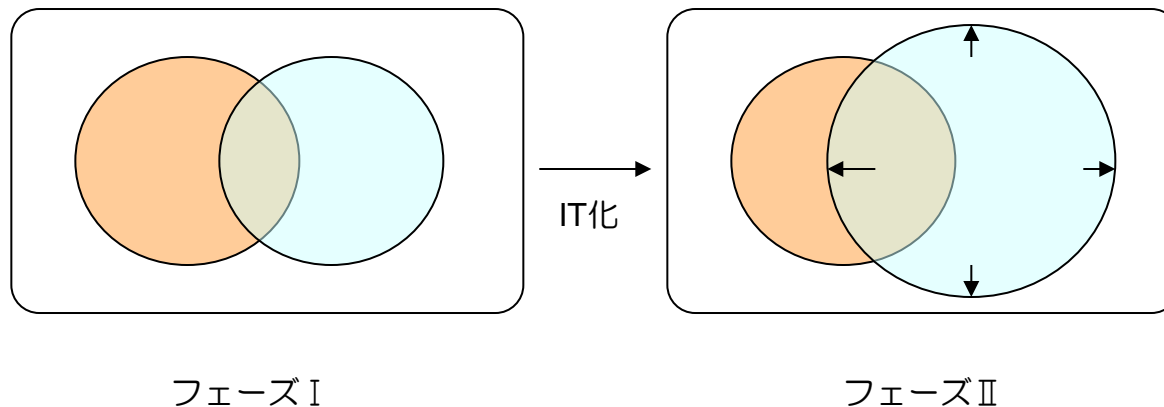
●この全体の中に含まれる各々の要素が文字や言葉、映像などにより記号化もしくはデータ化されると、「個人情報」として、本人から離れたところで社会的に流通することが可能になる。これが右側の円の内部である。

●これとは別に、当該個人が「プライバシー」だと感じる事柄が左側の円の内部である。

●「個人情報」や「プライバシー」についてはここでは厳密には定義は行わない。

IT機器の発達による個人情報の範囲（外延）の拡大

●昨今のIT機器の発達により、従来は記録されなかった情報も記録されるようになりつつあり（携帯カメラ、防犯カメラ、ICカード、インターネット上のコミュニケーション等）、それによって、記号化・データ化された情報としての「個人情報」の範囲（外延）が広がりつつある。

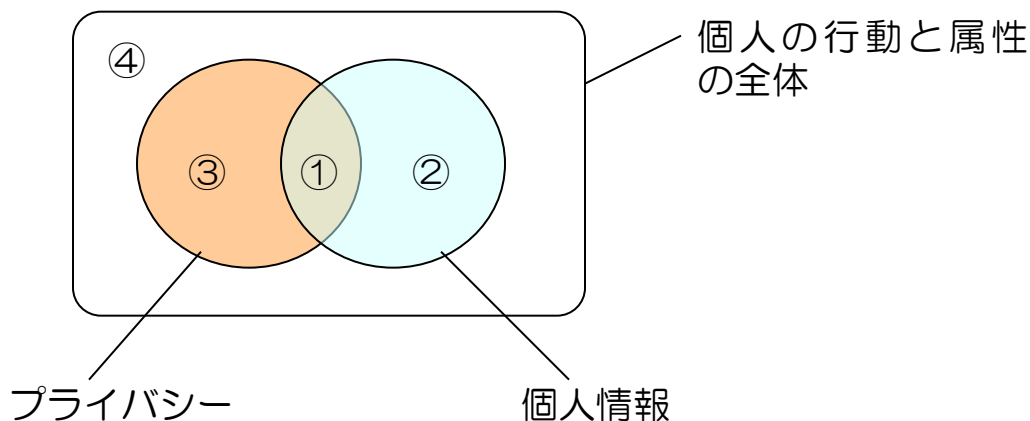


●それによって、個人情報とプライバシーの重なり合う部分も、図のように必然的に大きくなる。すなわち、もともとは本人にとってプライバシーである事柄が、データ化されて記録され、社会に流通してしまうようなケースが増加することになる。

●このように個人のプライバシーの領域がIT化によって「侵食」されていくと、どのようなことになるのだろうか？

個人情報とプライバシーの関係に関するモデルと、情報カテゴリ①～④

●このモデルに、先に示したの「情報項目の分布マップ」から導いたカテゴリ①～④を試みに当てはめてみる。



カテゴリ①：個人情報・プライバシー双方に該当するという意識が高い情報

⇒ID番号（住民票コード・免許証番号・保険証番号・社員番号等）・年収や貯金の情報・指紋・携帯電話番号・病歴・顔写真・通信履歴・アドレス帳の内容・家族に関する具体的事柄・学歴職歴・身長や体重・通信の内容・家族構成

カテゴリ②：個人情報の意識は高いが、プライバシーに該当する意識は低い情報

⇒氏名・住所・自宅の電話番号・生年月日・メールアドレス・職業・出身地

カテゴリ③：プライバシーという意識は高いが、個人情報という意識は低い情報

⇒自分の部屋の様子・ホームページの閲覧記録・スケジュール・知人や友人に関する具体的事柄・自分が写った写真や映像・商品などの購入記録・ブックマークの中身・支持政党や宗教

カテゴリ④：個人情報・プライバシー双方に該当するという意識が低い情報

⇒趣味・好きな本や音楽や映画・好きな歌手やタレント・よく読んでいる雑誌

●IT機器の機能高度化とインターネット上のコミュニケーション手段の発達により、個人に関するデータ化された事柄としての「個人情報」（①+②）の範囲は間違いなく拡大。

→カテゴリ②の情報のように、社会生活を送る上で日常的に開示しておりプライバシーとはそれほど考えられていない情報の利用・流通頻度が当然に高まる。

→カテゴリ①の情報のような、本人にとってプライバシーでありながら行政手続きや病院で診療を受ける場合には時として開示せざるを得ない情報についても、今後ますますデータ化され利用される頻度が高まる。

●カテゴリ①の情報についてはとりわけ、企業や行政は、個人のプライバシーを侵害することのないよう最大限の配慮を行う必要。

→その利用にあたっては、個人に対して利用方法を明確に説明した上で収集する、生体認証技術などの情報技術を用いてその利用範囲をサービス提供の上で必要最低限のものに制限する、個人の側からいつでもその利用を停止したり利用のオン／オフを選択できるようにするなど、保護の水準を高め個人の漠然とした不安や警戒心を解消するべく努める。さもなければ、生活者の側から積極的な提供を受けることは困難となるだろう。

●**カテゴリ③**に当たる情報については、いまだデータ化された形での利用が少ない情報であり、かつ個人のプライバシー意識が高い情報であるが、情報社会の進展により、今後急速にこの領域の情報の多くは実質的に**カテゴリ①**に吸収されていき、企業や行政による利活用が進んでいくものと考えられる。

→この領域の情報をいかに適切に保護して生活者に安全性をアピールするかが、企業や行政の今後の課題。

●**カテゴリ④**に当たる情報は、マーケティング手法の拡大やインターネット上のサービスの普及によりデータ化は一部で進んでいるものの、個人のプライバシーの意識はかならずしも高くない情報である。この情報も、情報社会の発展により、やはり徐々に**カテゴリ②**もしくは**①**に吸収されていくものと考えられる。

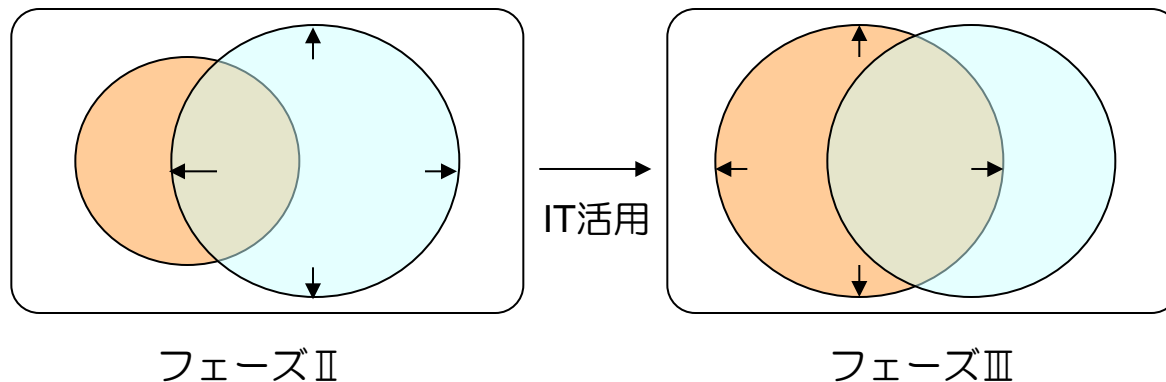
→このカテゴリの情報については、企業や行政が適切な保護を行なうことを前提として、情報技術による新たな利用方法を開拓してその流通を促進することによって、個人の社会生活の向上を図る可能性が開かれている領域である。

プライバシー領域のITによる強化

●ITの進展とインターネット上での利用者の意識の変化によって**カテゴリ③**の領域は縮小化あるいは希薄化しつつある。→ITの利活用を推進する立場からは、**カテゴリ③**のような個人のプライバシーに関わる事柄もデータ化を行い個人情報として流通させ、**カテゴリ①**や**②**の領域に吸収することで、その利活用を図ることが望ましい。

→一方、個人の立場からは、**カテゴリ③**の領域が全くなることが良いわけではない。**カテゴリ③**の領域、すなわちデータ化されない個人のプライバシーに関わる領域とは、内面の自由を保障するために必要な「私的領域」であり、言わば他人には開示したくない「個人的な秘密」である。

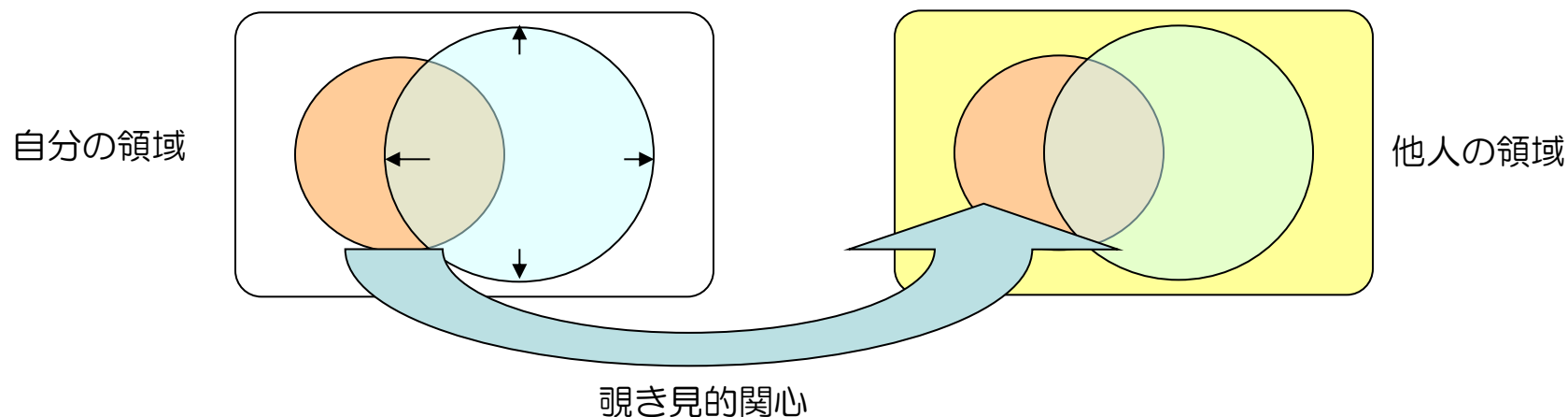
●ただし、第Ⅲ節で見たように、約4分の3の回答者が家族や友人に知らせていない「個人的な事柄」があると答えており、そのうちの半数はその事柄に関連してインターネットや携帯電話といったITを活用している。これは、下図のように、**カテゴリ③**の領域がITによって強化されうることを示している。



プライバシー被害と加害

●さらに、第Ⅳ節で見たように、ITを通じて自分の個人情報を見られたりプライバシーを覗き見されるといった「プライバシー被害」の意識のある人、言ってみればカテゴリ③が侵食されつつある人は、ITを通じて逆に他人の個人情報やプライバシーを覗き見するという「プライバシー加害」の経験の割合が相対的に高くなっている。このような傾向は、とりわけIT機器やインターネットに習熟している若い世代で見られるものであった。

→情報機器の普及や利活用がさらに進展する将来においては、個人対個人でのこの情報加害の問題も深刻化するものと考えられるため、情報社会の健全な発展に向けた対応が必要となる分野となるだろう。



今後の課題

- ITの振興を推進する立場としては、個人情報 の適正な保護を前提として、データ化された個人情報の流通と利活用を促進し、個々人の社会生活のさらなる向上に努める側面を推進することが必要。
- 生活者の立場としては、データ化の波が押し寄せる情報社会において、情報技術とうまく折り合って自分自身の私的領域を確保し、豊かな社会生活を送るための方策を模索する側面を追求していくことが必要。